河浦町文化財調査報告第４集

ka wa chi u ra

河内浦城跡 Ⅲ

２００１年

熊本県天草郡河浦町教育委員会

序　文

河浦町では、農林水産省の補助事業(山村振興等農林漁業特別対策事業)として、中世城の河内浦城跡を整備することになりました。隣接の天然温泉・総合交流施設『愛夢里』と結ぶことによって、城跡を多くの方々の交流の場にしたい思いがございます。

平成元年度と３年度の発掘調査が、整備事業の根底になりました。城跡の中心部は、完掘しておりましたので、当時の調査結果を元にして、様々な計画が策定されました。特に『愛夢里』から、山頂までは、木製階段の遊歩道が設置されることになりました。３本の竪堀を跨いで、堀切に架る木橋を通って山頂に至るコースです。そこで、竪堀は測量調査を行い、堀切は、発掘調査を実施することになりました。堀切は、以前のトレンチ調査から、今回、全掘を目指しました。

調査は、今村克彦先生と大田幸博先生の指導を受けて実施しましたが、結果として、堀切から出土した瓦は、両先生から「富岡城跡の瓦と同類で、珍しい色瓦もある」との見解が示されました。これを受けて、教育委員会では、平成12年11月２日に記者発表を行いました。出土遺物は、当時のことを、今の世に伝える貴重なタイム・カプセルであることを実感しました。

調査そのものは、短期間でしたが、貴重な発見がありましたので、河内浦城跡として３冊目の調査報告書を作成いたしました。なお、この機会に、過年度調査分の出土遺物についても、再検討を行っています。瓦をはじめとして、これらの遺物は、４月にオープン予定の『河内浦城跡資料展示館』で、一般に公開する予定です。

最後になりましたが、河内浦城跡は、歴史公園としての整備が完了しました。望楼を復元し、建物跡の一つは、休憩所として利用するために、復元建物風に立ち上げました。屋根瓦は、出土瓦を復元した特注品です。この他、２棟の建物跡を遺構明示しています。

この報告書と、河内浦城跡歴史公園が、中世を学ぶための教材と野外学習の場となりますなら幸いです。

平成１３年３月３０日

河浦町教育委員会

教育長　　吉　田　富　義

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の概要　第１節　調査の組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２節　調査の経緯と内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第３節　破城について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第Ⅱ章　検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第Ⅲ章　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第Ⅳ章　ま と め ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

発掘調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

《付論》自然科学分析調査報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

挿 図 目 次

第１図　城跡位置図	3	第８図　小振り平瓦実測図②	10
第２図　河浦町内所在の中世城跡	3	第９図　小振り平瓦実測図③	11
第３図　河浦地区(旧一町田村)周辺地形図	4	第10図　小振り平瓦実測図④	12
第４図　河内浦城跡周辺地形図	5	第11図　河内浦城出土の丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦実測図	13
第５図　河内浦城跡全体測量図	6	第12図　第２次調査検出遺構①	17
第６図　堀切実測図	7	第13図　第２次調査検出遺構②	18
第７図　小振り平瓦実測図①	9	第14～25図　出土遺物実測図①～⑫	20～31

表 目 次

第１表　町内所在の中世城跡一覧	3	第７表　瓦観察表⑤	13
第２表　出土瓦総量表	7	第８表　建物跡柱穴計測表	18
第３表　小振り平瓦観察表①	9	第９表　出土遺物観察表①	19
第４表　小振り平瓦観察表②	10	第10表　出土遺物観察表②	25
第５表　小振り平瓦観察表③	11	第11表　土師器法量表	25
第６表　小振り平瓦観察表④	12		

例 言

1．本書は、熊本県天草郡河浦町教育委員会が、平成12年度に実施した河内浦城跡の発掘調査報告書である。調査は、平成元年度と３年度に続くもので、第３次にあたる。

2．町では、農林水産省の補助を受けて、平成12年度に、河内浦城跡の整備事業を実施した。発掘調査は、整備事業に伴うものである。堀切に木橋を架ける計画があり、事前調査を行った。

3．出土した瓦と、過年度調査分の遺物は、今回、再整理を行った。これらについては平成13年度に開館する「河内浦城跡資料展示館」に、展示予定である。なお、過年度調査分の遺物については、これまでも、一部を町立天草コレジオ館に展示してきた。

4．発掘調査は、今村克彦氏と大田幸博氏の指導により、教育委員会が実施した。

5．遺物の実測と、再整理は石工みゆきさんが行った。陶磁器については、大橋康二氏の指導を受けた。

6．本書の執筆は、今村氏・大田氏・石工さん・溝口真由美さん・山下で行った。執筆名は、文末に記している。

7．製図作業は、溝口さんと石工さんが行った。

8．本書に掲載した写真は、大田氏が撮影した。

9．本書の編集は、大田氏が、溝口さんの助力を得て行った。

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の組織

調 査 主 体　　河浦町教育委員会

調査責任者　　吉田富義（教育長）

調査担当者　　山下美代（教育課・課長補佐）　石工みゆき　溝口真由美

専門調査員　　今村克彦（熊本市整備振興局長）　鶴田倉造（郷土史家）

　　大田幸博（熊本県文化課・課長補佐）　大橋康二（佐賀県文化課・課長補佐）

調査事務局　　溝口十紀生（教育課長）　山下美代

関　係　課　　宮崎　励（農林課長）　田中　剛（農林課・課長補佐）

報告書作成　　山下美代　石工みゆき　溝口真由美

調 査 協 力　　平嶋弘幸（㈱大揮環境計画事務所・代表取締役）　〔山下〕

第2節　調査の経緯と内容

河内浦城跡の調査は、町の自主事業として教育委員会が、平成元年度と3年度に実施した。第3次にあたる今回は、これらの調査結果を元に、町が農林水産省の補助事業として、城跡の整備に取り組む中、町教委を調査主体として補足調査を実施した。現場での調査は2日間限りであったが、多くの成果があり、資料整理と調査報告書作成に2ケ月を要した。

整備事業は、城跡の歴史公園化を計るもので、平成11年度からの繰り越し事業である。麓にある天然温泉・総合交流施設『愛夢里（あむり）』から遊歩道を設置し、小高い山頂の平場には、望楼を復元すると共に、建物遺構をベースにした休憩所を建設した。さらに、3棟の建物跡は柱列を再現し、遺構明示を行った。雑木も伐採し、張り芝も行ったので、山城は、見学者の方々の交流の場として、平成の世によみがえった。

遊歩道の工事で、山頂の北下に刻まれた堀切に木橋を架ける計画があったので、教育委員会では、事前の発掘調査を行った。堀切の過去の調査では、部分的なトレンチ調査に留まっていたので、全掘を目指し、調査後は、往時の姿に復元することになった。結果として、小規模ではあるが、岩盤を粗く掘り窪めた大規模工事の堀切であることが再確認された。検出後の眺めは、強烈であった。堀壁はもろかったが、堀切の凸凹した岩盤は、一部がシルバー色を呈し、輝いた状態にあった。ただし、予想された橋脚の跡は検出されなかったので、木橋は、あくまでも想像復元ということになった。

この調査では、堀の埋土から、小振りの瓦片がまとまって出土した。純然たる中世山城からの出土であったために、専門調査員の今村先生や大田先生も大いに驚かれた。さらには、このすべての瓦が、近隣の富岡城跡(近世城)から出土した瓦に酷似していたため、資料価値は、一層、増大した。一連の調査成果については、本書の河浦町文化財調査報告第4集『河内浦城跡Ⅲ』に収録した。なお、報告書の作成にあたっては、第1・2集の報告書からも要点を抜粋し、必要箇所を再録した。また、大橋康二氏の指導を受けて、過年度の出土遺物の再検討も行った。なお、整理を終えた遺物は、『愛夢里』敷地内に、建設された『河内浦城跡資料展示館』に並べ、平成13年4月8日から一般公開することになった。　〔山下〕

第3節　破城について

①富岡城における「戸田氏の破城」が有名である。ただし、この場合、文献上から、その語句を知り得るだけで、実態そのものは不明であった。それが解明されたのは、近年における佐敷城跡(芦北町)、富岡城跡

(苓北町)、鷹ノ原城跡(南関町)での発掘調査による。

この三城は、近世初頭に築城された近世城のはしりで、いずれも高積みの石垣を有している共通性がある。これが、破城に際しては、中途まで壊した石垣を土中に埋め込んでいた事実が明らかになった。城としての機能を完全に無くすため、意図的に城を壊すのが破城である。富岡城の場合、文献記録によれば、解体された建物は、部材までもが、全て、城外へ持ち出されている。初期の江戸幕府は「反乱の拠点になり得るため、役目を終えた城については、破壊する」との政策を掲げたからである。そこで、現場の責任者は、外部に対し「城の生命線である石垣は、全て、撤去した様に見せかける」必要があった。そのためには、半壊石垣を埋め込むことが、最も合理的であった。破城行為は、マイナス要因であるため、工事費を節約して、工事期間を短縮する必要があった。これが破城のキーワードである。

これに対比するのが「廃城」で、城は放置されるだけなので、石垣や建物は、そのまま残ることになる。破壊されるのは、二次的な要因による。熊本城では、明治時代の西南戦争により、大天守などを初めとして、主要建物が焼失した。石垣は、城内に駐屯した鎮台によって、一部が壊された。平城である八代城は、市街化によって本丸の一角を残すのみとなった。人吉城は、石垣が、現存するものの、建物全てが撤去された。

②近世初頭の「破城」に関連するのが、元和元年(1615)の「一国一城令」である。17世紀後半に破城された富岡城を除くと、佐敷城や鷹ノ原城は、この幕府の政策に従って壊されている。幕府は「一藩に一つの城」しか認めず、それ以外の城は、破壊を命じた。最も、肥後藩の場合、熊本城以外に、八代城(初期は麦嶋城)の存続が許された。薩摩の島津氏対策のためであった。なお、富岡城の場合、江戸初期の天草は、寺沢氏をはじめとして、山崎氏や戸田氏の私領であったため、適用外となっている(人吉城は、相良藩の本城)。

③天草郡内で「一国一城令」の適用を受けた城は6城である。表現を代えれば、郡内で最後まで残った中世城ということになる。『並河聞書』には「富岡・栖本・斉津・久玉・河内浦・軍ケ浦」が記載されている。当書を記した並河兵右衛門は「一国一城令」が出されるまで、河内浦城代を勤めた人物である。ここでは「城を割」と破城を表現してある。ただし、河内浦城を除く5城については、若干の補足が必要である。

富岡城は、明らかに志岐城を意味する。寺沢氏が築いた富岡城のことではない。最も、近世初頭では、志岐城=富岡城との考えがあったのかも知れない。確かに、発掘調査によって、富岡城は中世城のリメイク城であることが判明している。原点になったのは、志岐城の出城と推定される。栖本城(栖本町)は、現在、円性寺の境内となっている。この点では、河内浦城跡の崇圓寺と似かよる。両寺とも、城主の居住区域が、寺地として再利用されている。斉津城は、上津浦城(有明町)のことで、並列する二つの小山が城跡地である。久玉城(牛深市)は、石垣を有する山城である。ただし、石垣に破城の痕跡は無く、廃城の状態に近い。軍ケ浦城は、城名から天草町の「軍ケ浦」に城地が求められるが、実態が明らかでない。当地は、入り江に所在する小集落で、周辺にも、城地にふさわしい高台も無い。

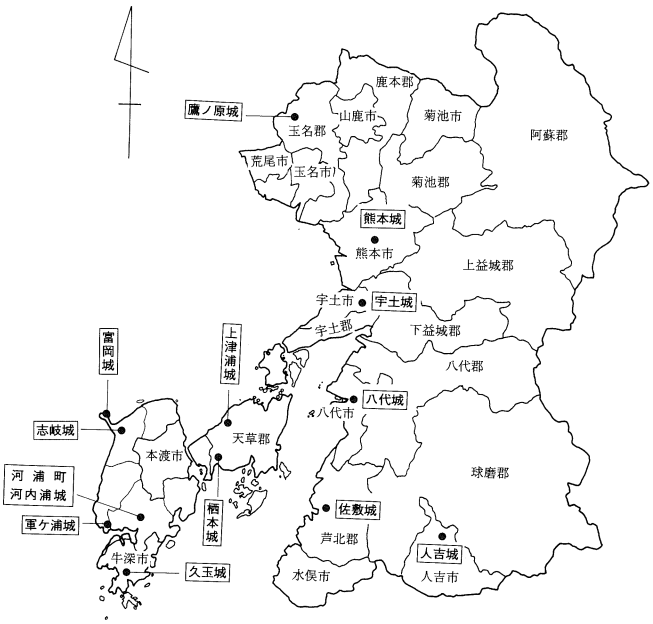
6城の中で、石垣を有するのは、久玉城跡のみである。それでは、どのような破城が行われていたのであろうか。確かに、河内浦城の場合は、本丸北下の堀切は、短時間の内に埋め戻されている。これが、破城の行為を意味するのであろうか。しかし、石垣を伴わない城の破城は、実態不明。一方、久玉城跡では、どのような破城が行われたのであろうか。石垣に手をつけていないのは、最大の疑問である。

④北野　隆教授(熊本大学工学部)は「天草・島原の乱後、再度の破城が

『一国一城令』

〔並河聞書〕元和元年(一六一五)

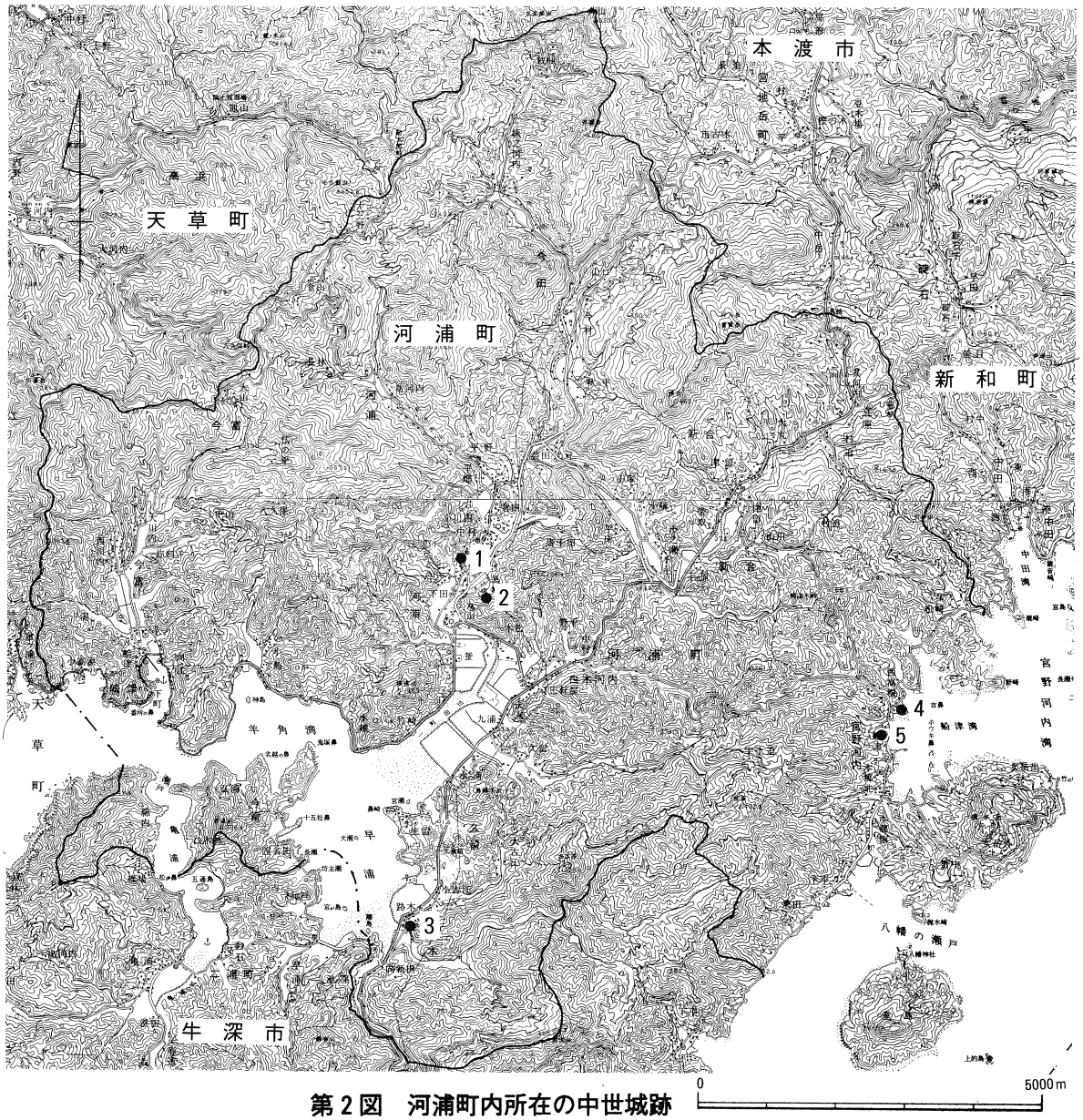
栖本奉行　石原太郎左衛門
河内浦奉行五百石　中嶋与左衛門　足軽二拾人
両所共に　一国一城にて城を割　屋敷構斗也
天草六ケ所城在之
富岡・栖本・斉津・久玉・**河内浦**・軍ケ浦　大浦トモ言



第１図　城跡位置図

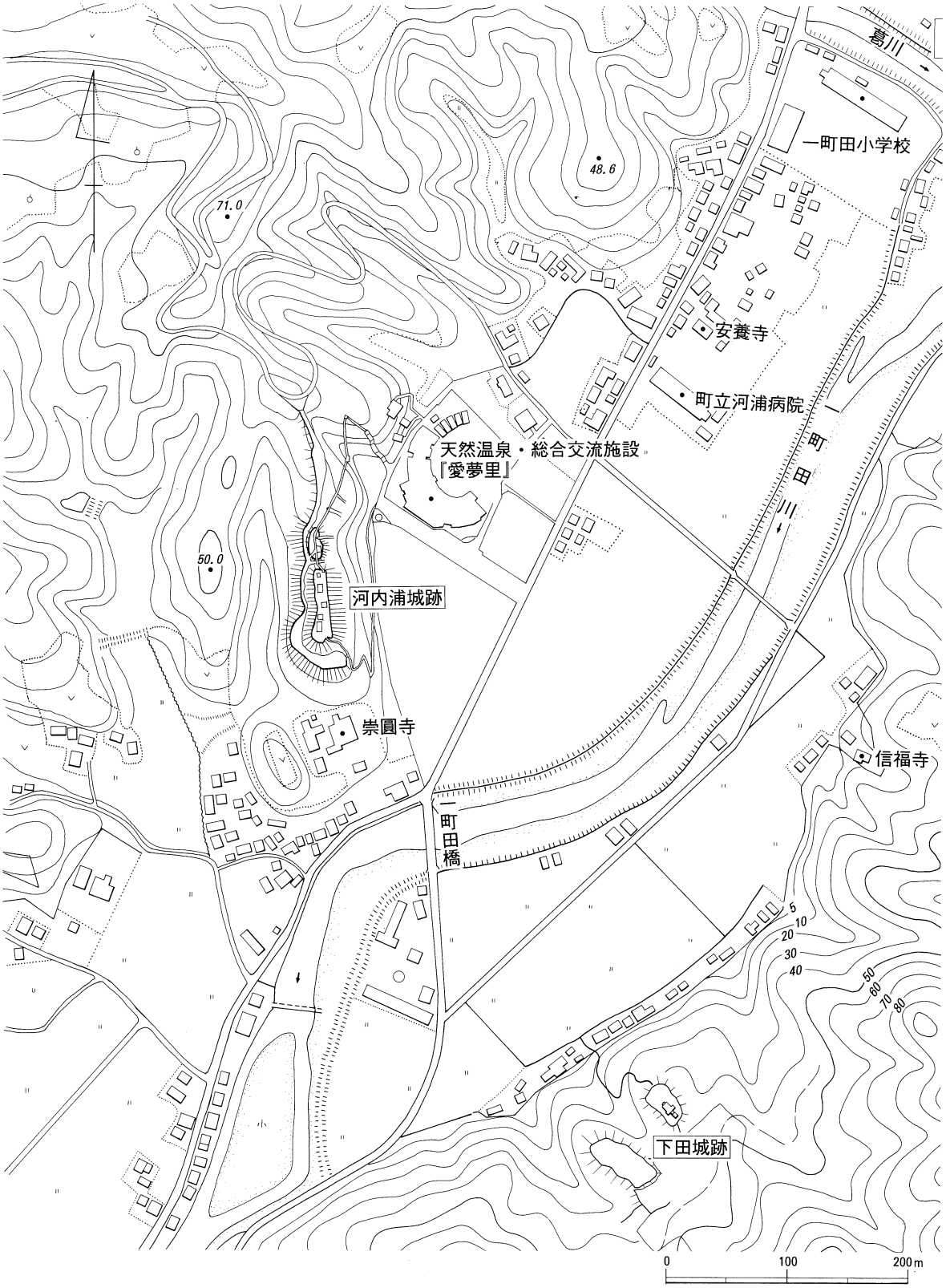
No.	城　名	所　在　地
1	河内浦城	大字河浦　字湯立免
2	下　田　城	大字河浦　字城山
3	路　木　城	大字路木　字富田
4	西高根城	大字宮野河内　字東部田
5	宮野河内城	大字宮野河内　字蔵浦・船津

第１表　町内所在の中世城跡一覧

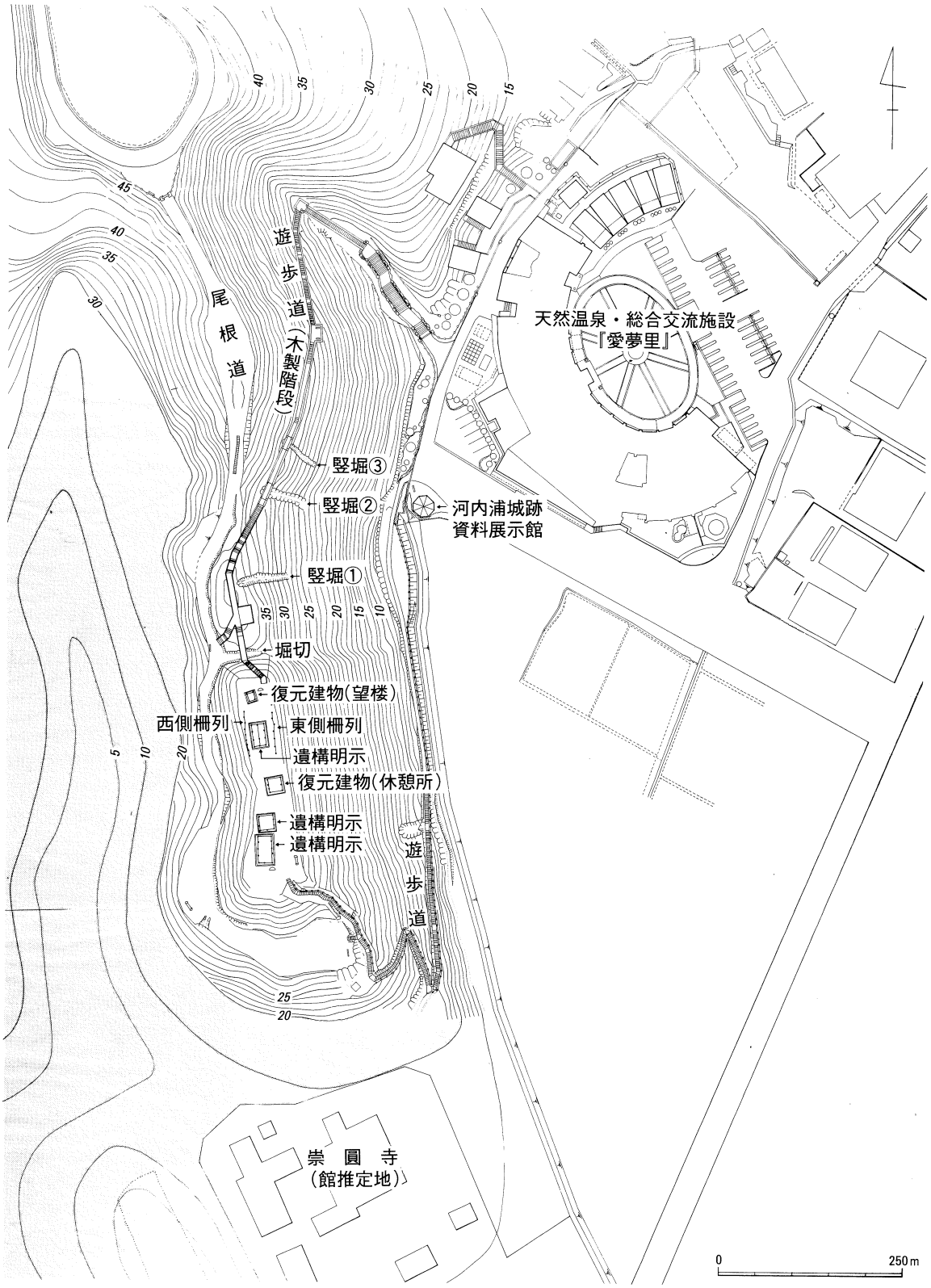


第２図　河浦町内所在の中世城跡

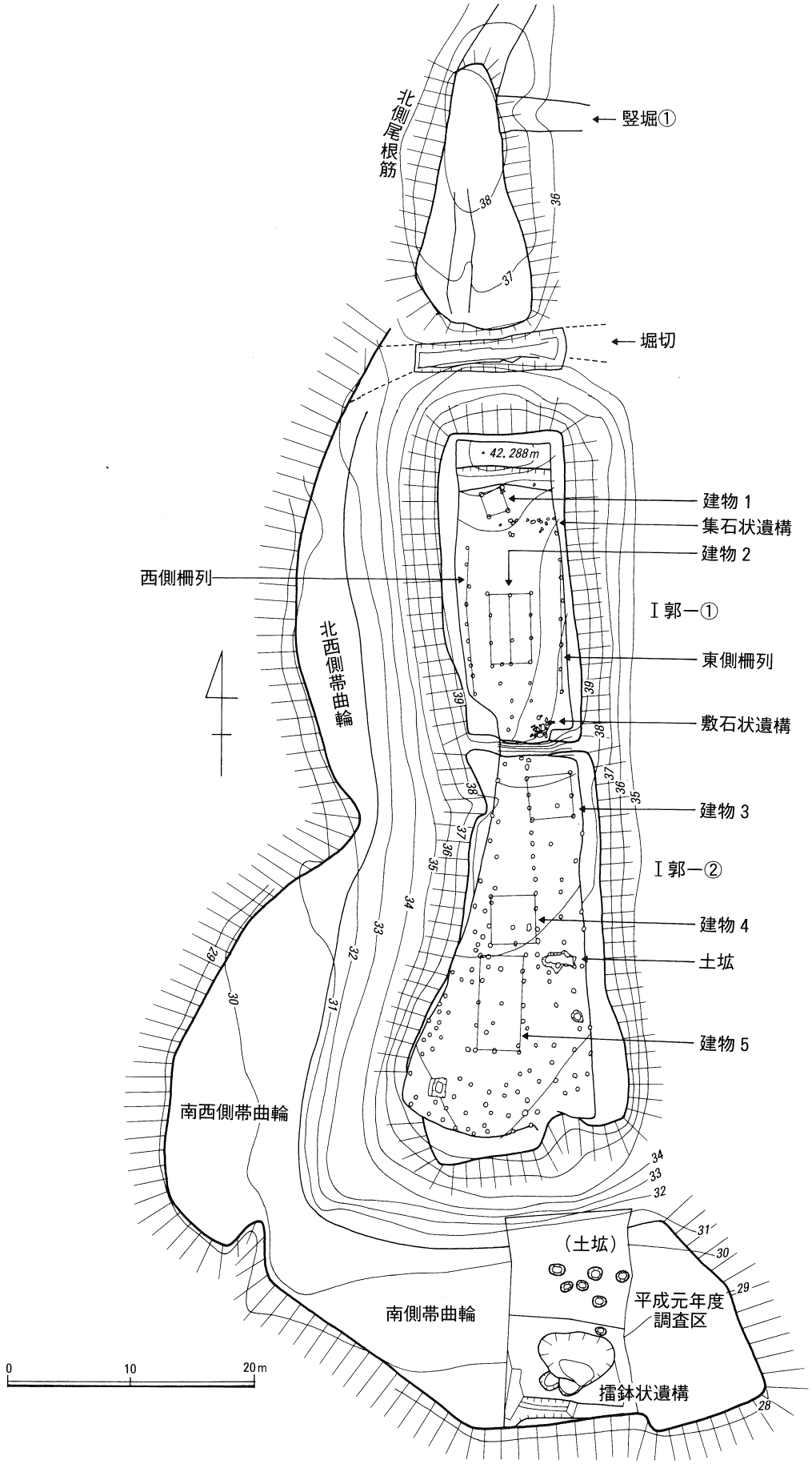
行われている」と推論されている。鷹ノ原城跡の発掘調査に基づく見解で、二度目の破城を示す堆積層から、寛永通宝が出土したことによる。確かに、天草・島原の乱は、初期の江戸幕府を震感させる出来事であった。そこで、場所によっては、再度の破城が命じられたという考えである。鷹ノ原城の城構えは、石垣の壮大さに特色があることから、駄目押しが必要であったと思われる。このことからも分かるように、現時点では、破城＝石垣の破壊というイメージが強い。これに続くのが、破城＝堀の埋め戻しである。　〔溝口・大田〕



第３図　河浦地区（旧一町田村）周辺地形図



第4図　河内浦城跡周辺地形図



第５図　河内浦城跡全体測量図

第Ⅱ章　検出遺構

1．主郭の北側真下に堀切がある。この遺構は、平成２年度に、南側壁面でトレンチ調査を試みているが、岩壁がもろかったので、旨くいかなかった。そこで、今回、木橋を架ける計画が持ち上がったので、調査面積を拡大して、再調査を試みた。重機を導入して、慎重に作業を進めた。

①堀切は、岩盤を大きく掘り込んでいた。しかし、大きな問題が発生した。堀底は確定し、北側壁面は、どうやら検出できたが、主郭側の南壁は、中途から上位にかけて、岩質が想像以上にもろく、ボロボロの状態にあった。しかも、作業を進めて行くうちに、壁面の崩落とオーバーハングが目立ってきたため、安全面を考慮して、調査を中止した。今回も、南側壁面を確定する事が出来なかった。必然的に、当時も似たような状態にあったことは否めない。そのため、南壁では、しがらみを組んだりして、特別な防壁工事がなされたものと思われる。そうでもしなければ、堀切として成立しないことは、明らかである。どう考えても、南側壁面は、岩盤露頭の状態になかったと推定される。

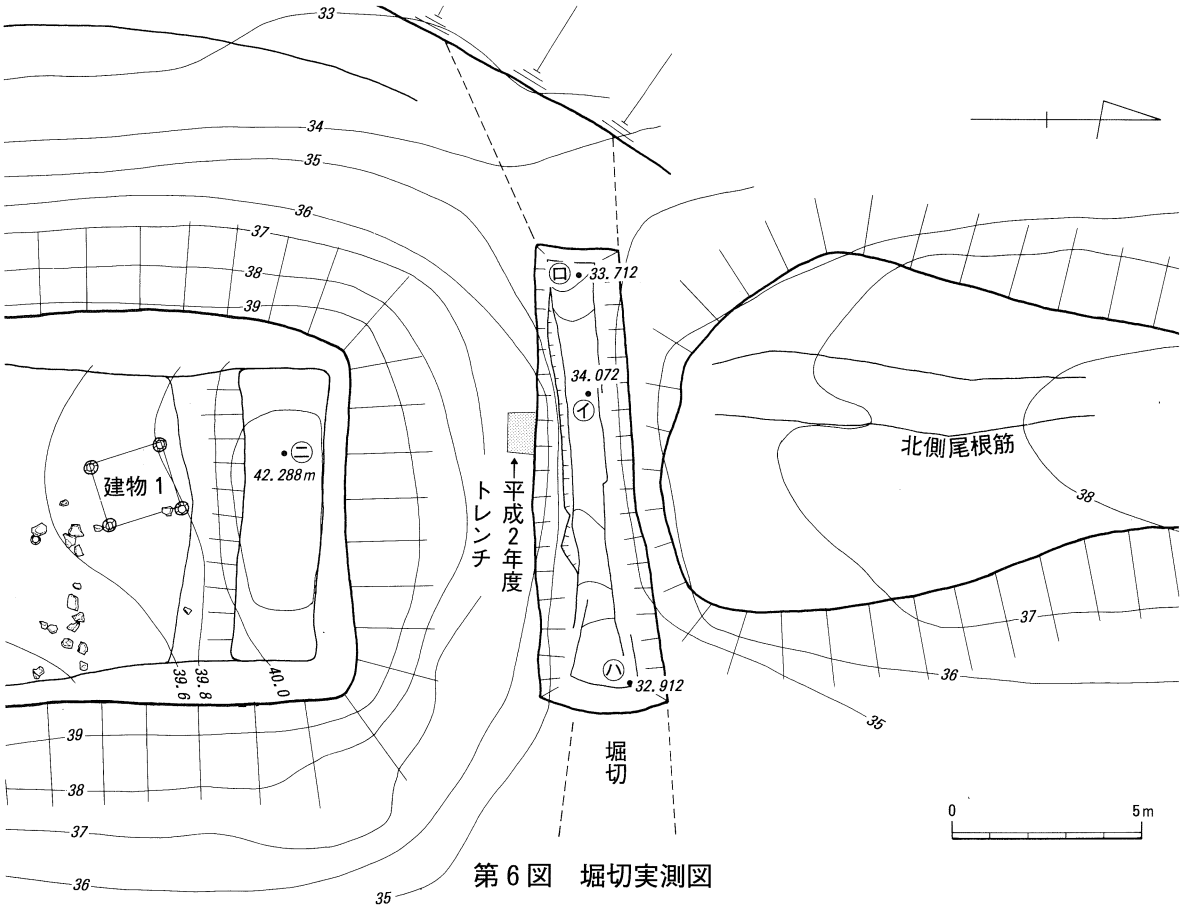
②トレンチの長さは12.2m、幅は東端で3.3m、西端で2.2m。検出された堀底は、中央部で幅0.9m。平らな部分は、長さ2.5m分で、これより東西両端へ竪堀状に下っていく。堀底の標高は、㋑地点で34.072m、東端の㋩とは1.16m。西端㋺とは0.36mの比高差がある。縄張りから見た場合、堀底㋑とⅠ郭－①の㋥とは－8.2m、北側尾根筋とは－3.9mの比高差がある。

③この堀切から出土した瓦片の総量は、42.525kg。いずれも、硬質の素焼き瓦で、灰色瓦の中には、色瓦も混じっていた。平瓦がほとんどで、完形品は、一片もなかった。

平　瓦	灰色瓦	28.259kg
	色瓦	3.842kg
丸　瓦	灰色瓦	3.162kg
	色瓦	6.956kg
軒　瓦	灰色瓦	0.082kg
	色瓦	0.224kg
計		42.525kg

第２表　出土瓦総量表

④堀底と北側壁面には、凹凸面が目立った。これは、岩盤が縦長にポロリと割れることによる。非常に、調査しづらい堀切で、調査者は、中央町の堅志田（かたしだ）城



第６図　堀切実測図

跡から検出された堀切が強く脳裏にあったので、かなり戸惑った。堅志田城跡の堀切は、主郭とⅡ郭間の尾根筋を断ち切ったもので、凝灰岩を大きく掘り窪めているが、堀壁も堀底も鏡面のように綺麗に整形されていた。加工しやすい岩質であったことが分かる。最も、この堀切は、城門を兼ねるもので、堀底からは、薬医門の柱穴が検出されている。この外的な要因も、仕上げに影響したものと思われる。一方、河内浦城の堀切は、純然たる防禦施設で、もろい岩質のこともあって、最小限の仕上げに留められたものと思われる。

⑤疑問も残る。この岩質では、どのような対策を講じても、かなりのスピードで、風化が進むのではないか。メンテナンスを心がけても、そのままの形で、長期間の保持は、無理のような気がする。有事の際に、その都度、素早く手直しされたものと思われる。今回、検出された堀切は、埋土の中に、瓦片が混じっているところから、河内浦城の終末期の姿である。

⑥堀底は、横方向に見た場合、中央部が、やや浅く、両端へ竪堀状に下っている。他の山城で、よく見られる構造である。この場合、肩部に掻き上げ土塁が積まれているが、河内浦城跡では、その痕跡が明確でない。破城の際に壊されて、積み土が堀切の埋土に利用された可能性もある。

⑦城跡の公園化にあたっては、この堀切に木橋が架けられた。見学者の通路を確保するために必要な施設である。バリアフリーの意味もある。想像復元と、はっきり断っておけば、いいと思う。玉名郡南関町の蟲嶽(つあだけ)城跡（大津山(おおつやま)城跡）には、尾根筋に刻まれた複数の堀切に、同様な木橋が架けられ、好評を得ている。

２．城跡の整備に際し、城山の樹木を伐採したところ、東側斜面から３本の竪堀が見つかった。決して、後世の土砂崩壊痕ではない。並列しているために、一種の畝堀である。ただし、この竪堀は、そのまま上位に延びて、堀切に変化はしない。岩盤の状態から、この断ち切りを工事を断念したのかも知れない。最も、危険な尾根続きの北側に、堀切が無いのは、このためであろう。〔今村・大田〕

第Ⅲ章　出土遺物

河内浦城跡の堀切から出土した屋根瓦が、富岡城跡(苓北町)の瓦と同類であることが判明した。この屋根瓦は、大きな特色がある。〔非常に小振りである〕〔焼かれた温度が非常に高い〕〔煤塗りをしない素焼きのままの状態である〕〔薄手である〕〔色瓦が混じる〕ことの５点である。(注：普通は、最後に松の葉を使用して「いぶし瓦」とするが、ここでは、この工程が省かれている。いぶし瓦でなければ、雨水が浸透することが考えられる。ただし、この素焼き瓦は、余りに硬質瓦であるために、その心配も不要のようである)

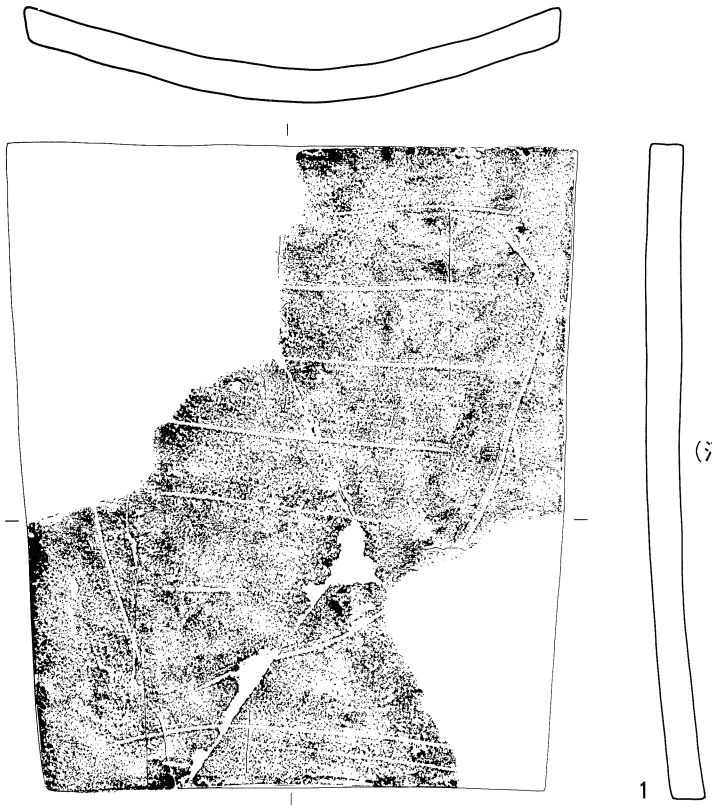
これらのことから、次のように推論される。

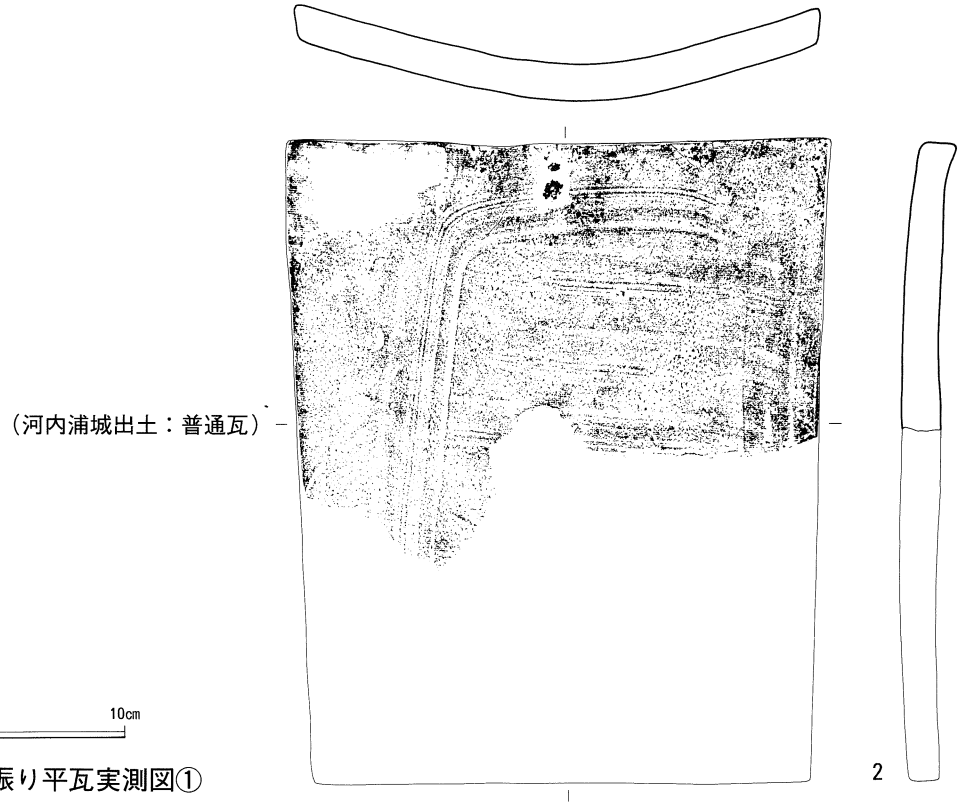
①唐津藩主の寺沢広高が、富岡城を築くにあたり、近隣の河内浦城から一部の屋根瓦を徴用した可能性が出てきた。寺沢氏は、志岐城(志岐麟泉(しきりんせん))をリメイクして富岡城を築城したが、今回の発見により、石垣に加えて、建物瓦まで再利用したことが考えられる。

②色瓦の出土で、河内浦城の建物は、カラフルな装いであったことが想像できる。渡来した宣教師などを通じて、天草氏が積極的に西洋文化を吸収していたことが伺える。

③中世城の建物は、板葺・藁葺・茅葺などと考えられていたが、今回の発見により見直しが必要になった。

④元和元年(1615)の『一国一城令』により、藩では一城を除き、残りの城は破城された。郡内では「富岡城(志岐城)・栖本城・斉津城（上津浦城）・久玉城・河内浦城・軍ケ浦城」に適用された。これらの６城は、いずれも中世城で、命令が出た時は、いずれも廃城となっていたが、建物、石垣、堀割などの城郭としての素形が残っていたと思われる。河内浦城の事例からすれば、残りの４城も瓦葺屋根の可能性が高くなった。ただし、軍ケ浦城のみは、所在地が確認できていない。天草町の軍ケ浦は、漁村で、城跡に関する伝承が、残っていない。〔石工・大田〕



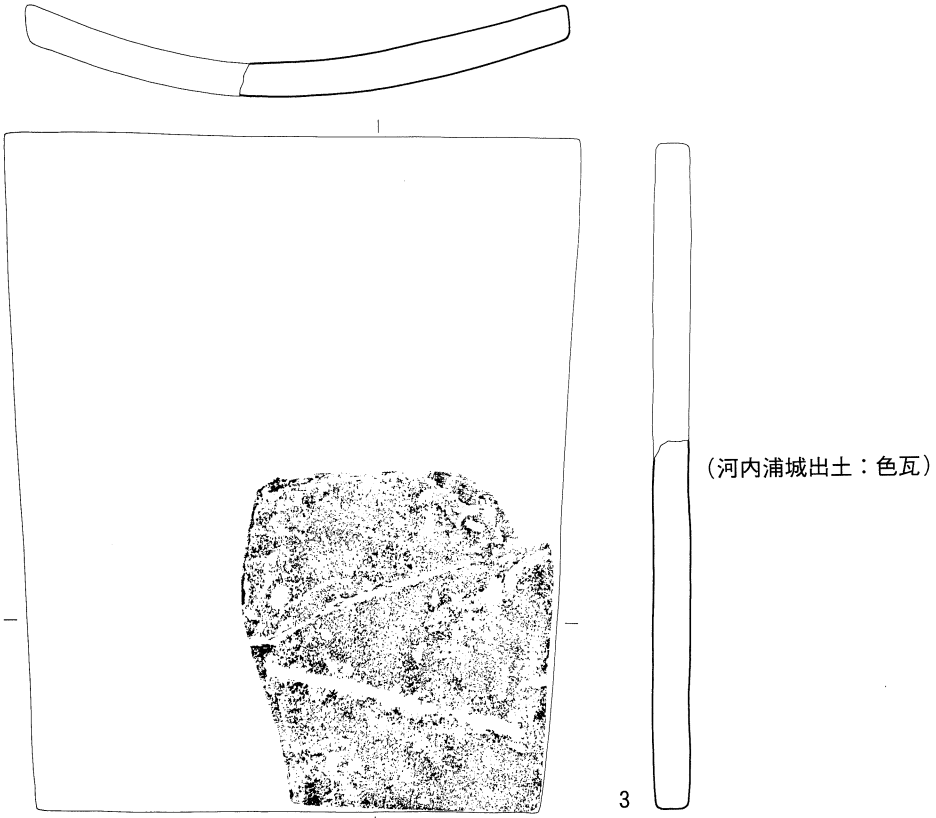


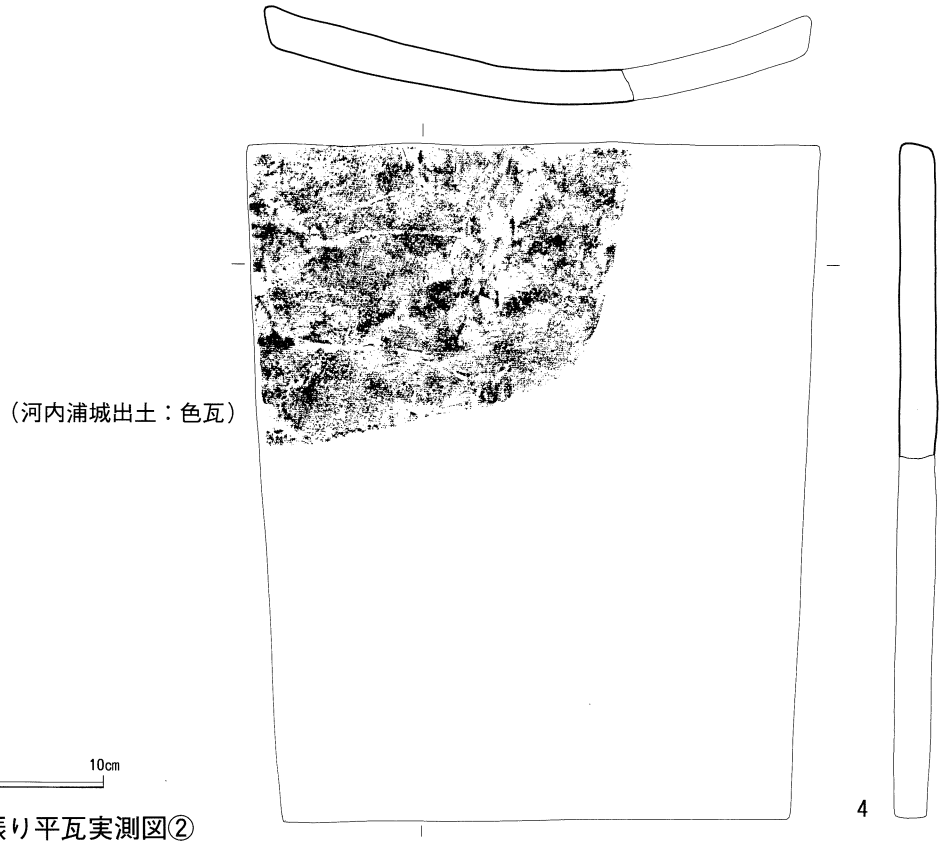
第７図　小振り平瓦実測図①

〔単位：cm〕

No.	上弦幅	下弦幅	長　さ	厚さ	色　調	胎　土	焼成	凸面	凹　　面	備　　考
1	(22.7)	(19.9)	25.5	1.3	灰　色	やや粗い	良好	ナデ	横ナデ。 横位の浅い沈線(８本)。	４点接合。
2	21.6	(19.7)	(25.3)	1.6	灰　色	やや粗い	良好	ナデ	ナデ後、 逆Ｌ字型の強いナデ。	２点接合。 ２分の１が残存。

第３表　小振り平瓦観察表①





0　10cm

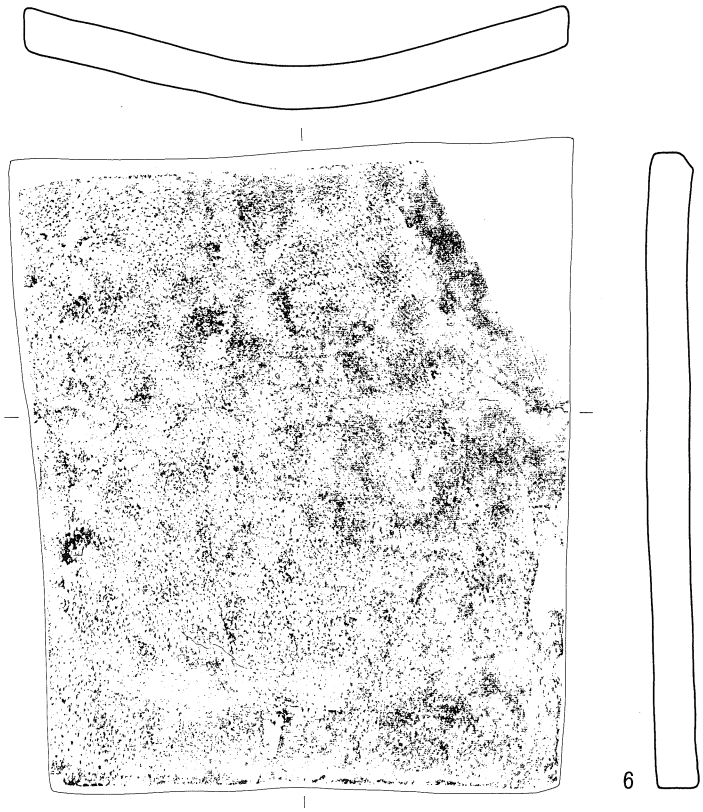
第８図　小振り平瓦実測図②

〔単位：cm〕

No.	上弦幅	下弦幅	長　さ	厚さ	色　調	胎　土	焼成	凸面	凹　　面	備　　考
3	(22.8)	(20.1)	(26.7)	1.4	鈍い桃白色	やや粗い	良好	ナデ	ナデ。下部に凹線。	２点接合。
4	(22.8)	(20.1)	(26.8)	1.5	鈍い橙白色	やや粗い	良好	ナデ	ナデ。	粗製瓦。

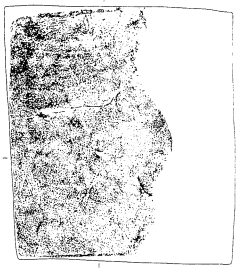
第４表　小振り平瓦観察表②

（河内浦城出土：普通瓦）



（富岡城出土：普通瓦）

小振り瓦と標準サイズ瓦の比較



5．河内浦城（小振り）

6．富岡城（小振り）
＊番号は、実測図のものと一致。

富岡城（標準サイズ）

0　10cm

＊富岡城跡から出土した標準サイズの瓦の大きさは、上弦幅28cm、下弦幅26cm、長さ32cm、厚さ2．2cm。5・6の瓦は、一回り小さいことが分かる。

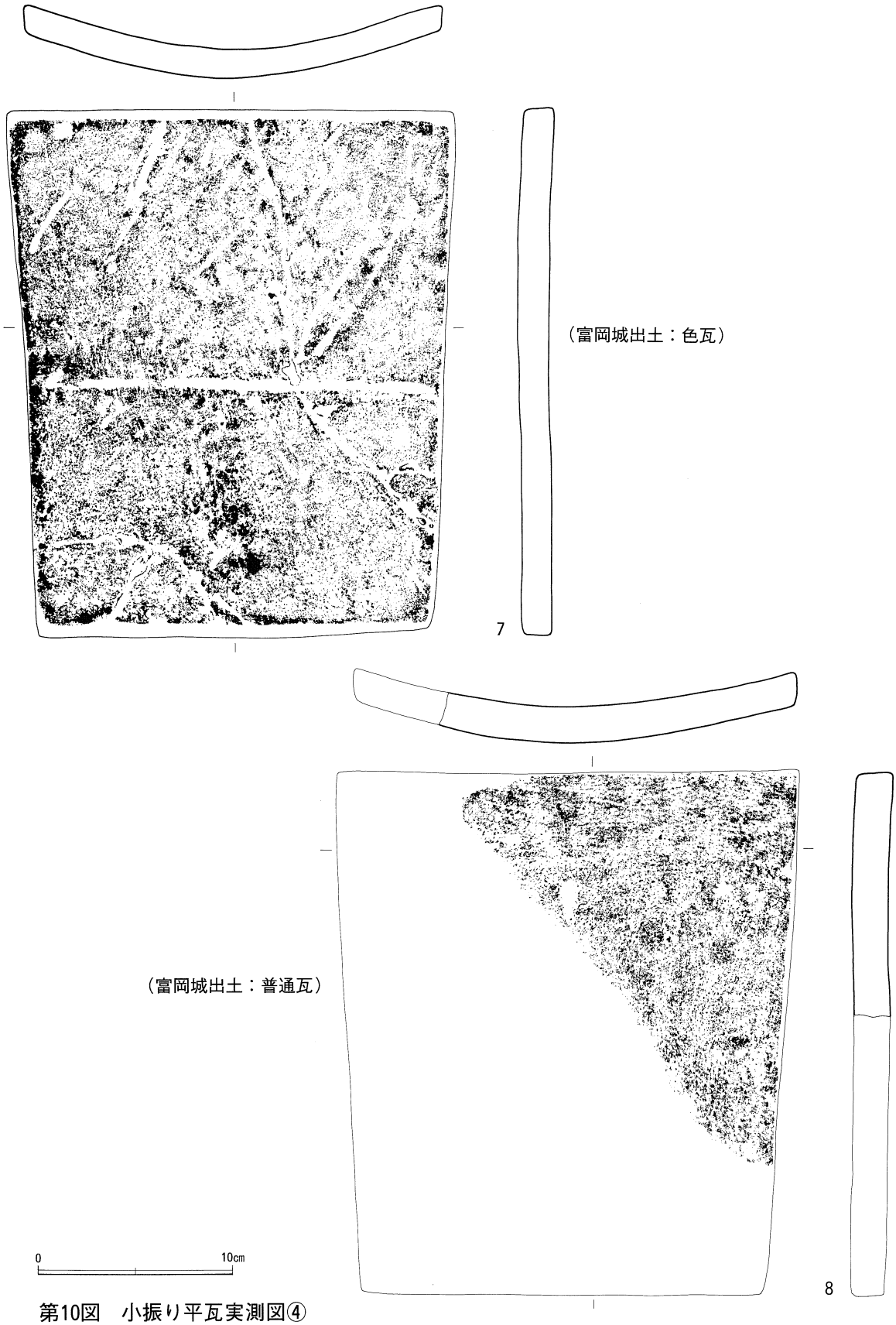
0　10cm

第9図　小振り平瓦実測図③

〔単位：cm〕

No.	上弦幅	下弦幅	長　さ	厚さ	色　調	胎　土	焼成	凸面	凹　　面	備　　考
5	(22.7)	(21.4)	25.3	1.4	灰　色	やや粗い	良好	ナデ	ナデ。	形状は歪。
6	22.4	20.2	25.1	1.7	灰　色	やや粗い	良好	ナデ	ナデ。	形状は、やや歪。一部は赤味。

第5表　小振り平瓦観察表③

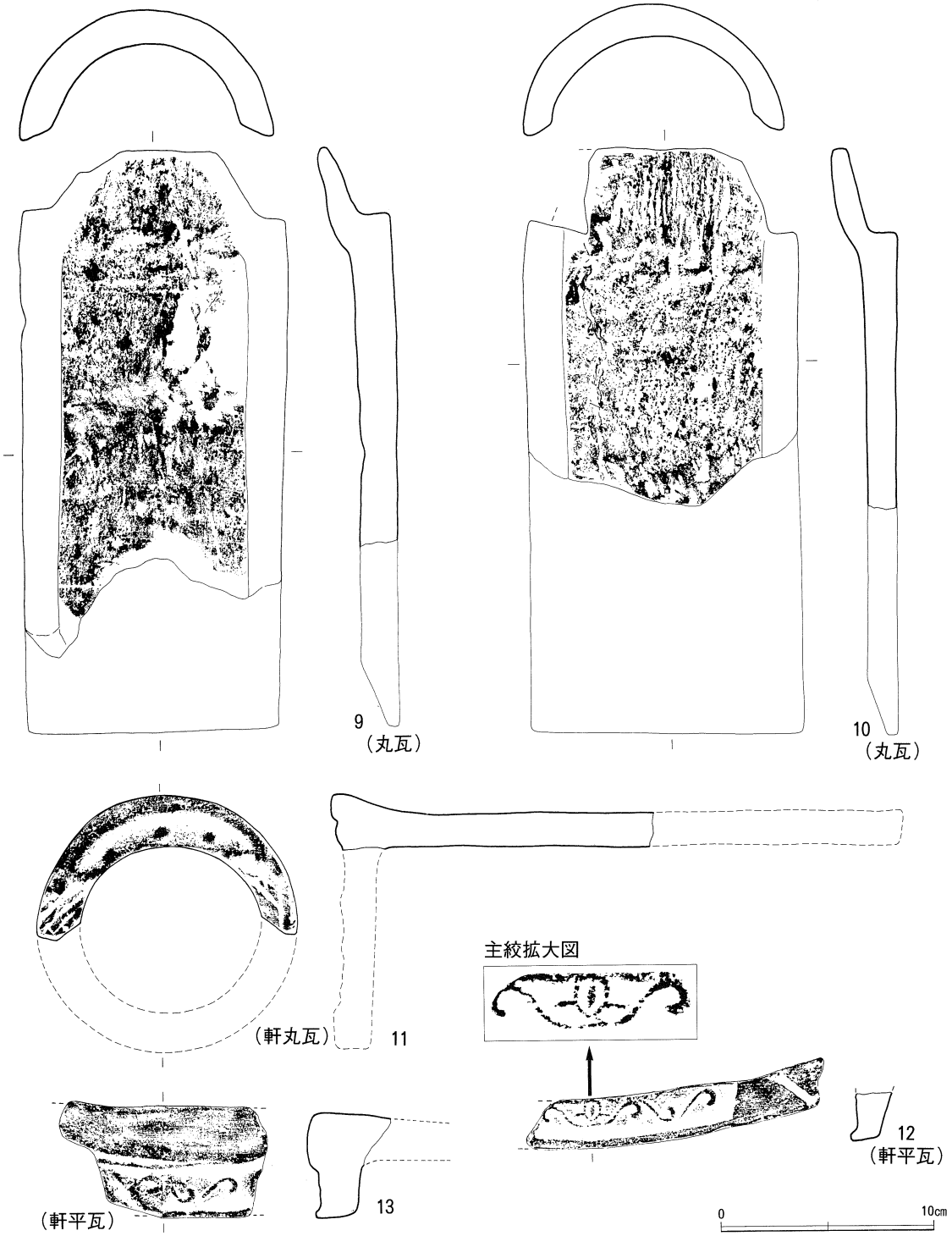


第10図　小振り平瓦実測図④

〔単位：cm〕

No.	上弦幅	下弦幅	長　さ	厚さ	色　調	胎　土	焼成	凸面	凹　　面	備　　考
7	22.9	20.3	27.1	1.6	鈍い桃白色	やや粗い	良好	ナデ	ナデ。	6点接合で、完形品。
8	(23.7)	(20.7)	(26.8)	1.8	褐 灰 色	粗　い	良好	ナデ	ナデ。	胎土に不純物。少し赤味。

第6表　小振り平瓦観察表④



第11図　河内浦城出土の丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦実測図

※11・12以外は色瓦

〔単位：cm〕

丸　瓦

No.	幅	残存長さ	高さ	厚さ	色　調	胎土	焼成	凸面	凹面	備　　考
9	12.3	19.2	6.0	1.8	鈍い桃色	精良	良好	ナデ	ナデ	4点接合。
10	12.8	16.6	5.9	1.5	鈍い桃色	精良	良好	ナデ	ナデ	2点接合。

軒丸瓦

No.	瓦当径	文様区径	丸瓦幅	厚さ	笵	色　調	胎　土	焼　成	凸面	凹面	備　　考
11	12.2	——	12.2	1.6	不明	灰褐色	やや精良	やや不良	ナデ	ナデ	瓦当の残存は、周縁のみ。

軒平瓦

No.	残存上弦幅	上弦高	残存紋様区上弦幅	残存紋様区上弦高	主　紋	色　調	胎土	焼成	備　　考
12	——	——	8.8	2.0	唐草紋	灰　色	精良	良好	紋様部分に異文様が混じる(矢印箇所)
13	9.7	5.3	7.2	2.2	唐草紋	乳白褐色	精良	良好	紋様部分。

第7表　瓦観察表⑤

第Ⅳ章　まとめ

①今回の第３次発掘調査は、整備事業に伴うものである。主郭下の堀切に木橋が架かる事になり、事前の調査を実施した。結果として、尾根筋の岩盤を掘り窪めたものであることが判明した。大がかりな土木工事と受け取れるが、岩質に問題があったため、雑な造りに見える結果になった。北側壁や堀底に凹凸があり、歪な形状をしているからである。これに加えて、岩面の剥離がひどいため、主郭側の南側壁は、確定できなかった。堀切に、シャープさが感じられないのは、このためである。工事の仕上げでは、かなりの苦労があったと思われる。いくら防禦施設とはいえ、ある程度の見栄えも必要で、この点を工事の指揮者は、どう考えたのであろうか。岩盤は、千枚岩のような感じで、面取りできる様な状態に無い。ハンマーで叩打すれば、バラバラに岩面が剥離するか、長軸方向にポロリと割れていく。したがって、尾根筋を真一文字に断ち切る作業は、容易でない。山続きとなる北側尾根筋に、これ以上、堀切がないのは、このためかも知れない。東側斜面を下る３条の竪堀は、堀切に代わる防禦施設と受け取れる。

堀切の位置は、主郭真下の鞍部にあたる。縄張り上、是非とも必要な防禦施設である。セオリー通りの配置で、これ無くして山城は成立しない程の重要遺構である。ただし、この堀切は、通常管理にも、多くの問題がある。風化進行も、かなり早かったはずで、堀壁崩壊の危険は、常に存在したと思われる。何らかの対策が講じられていたのであろうが、幾度と無く、掘り直す必要があったと考えられる。発掘調査で検出された堀切は、河内浦城跡の終末期のもので、破城によって埋め戻されたと推定する。

〔参考〕岩盤を掘り窪めた堀切は、県北の玉名郡でも確認されている。南関町の矗嶽城跡と菊水町の萩原城跡である。いずれも、大規模造りの山城で、尾根筋に複数の堀切が刻まれている。萩原城跡の場合、山腹斜面の岩盤が削り落されて、そのまま堀壁に繋がっており、かなりインパクトが強い。しかし、いずれも造りに限界があることは、否めない。シラス台地やローム層台地の鞍部を断ち切るのとは、訳が違う。

②堀切から、多数の瓦片が出土したことは、大きな驚きであった。本文中でも触れたが、城跡における瓦片の散在は、平成元年から既に認識していた。確かに、鶴田倉造氏は「富岡城跡の出土瓦に似ている感じがする」と指摘された。しかし、河内浦城跡の南下には、江戸時代から崇圓寺が存在しており、境内も城域に含まれることから、調査者と鶴田氏が「崇圓寺の屋根瓦であろう。常識的に中世の河内浦城跡と近世の富岡城の瓦は、直結し得ない」との解釈に至ったのは無理からぬことであった。中世城末期と近世城初頭に接点があるとは、到底、考えられなかった。

ところが、近年の発掘調査によって、このことを裏付ける所見が、次々と得られ、大きな進展を見た。県内では、中世城の佐敷城跡(芦北町)や鷹ノ原城跡(南関町)から、近世城と同じ石垣が検出された。富岡城跡(苓北町)は、志岐氏(中世・天草五人衆)の出城をリメイクした近世城であった。堅志田城跡(中央町)からは、近世城と同じ薬医門跡が見つかった。中世と近世では、支配体制に根本的な違いがあるため、当然、中世城と近世城の造りにも、連続性が無いとされてきた。これが覆ったのである。これらのことから、河内浦城に屋根瓦を持つ建物が存在していても、何ら不思議でないと言えるまでになった。

③今回、改めて、河内浦城跡と富岡城跡から出土した瓦を点検した。富岡城跡では、整備計画に伴う大規模な発掘調査が、平成７年度から実施されており、今年度で６次調査を数える。出土瓦を総点検したところ、結果として形状的には、全く、同一であることが判明した。業務を委託した古環境研究所からは「両瓦を蛍光Ｘ線で分析したところ、ほぼ同系統のものと考えられる」との結果報告がなされた(→32頁)。一方で、瓦が余りにも硬質であるところから、「胎土に天草陶石が混ぜられているのではないか」とする調査者の推論は「可能性は、考えにくい」との見解であった。しかし、これについて、今村や大田は、納得できない。

現に、宇土市古保里の中川瓦工場からは「胎土に、陶石を混ぜ合わせなければ、これ程の硬質にはならない」との示唆があっている。今後の検討課題としたい（中川瓦工場は、熊本城の復元瓦を手懸けている）。

④上記から「寺沢広高が、富岡城を築くにあたり、天草氏の河内浦城の屋根瓦を一部徴用した」ことが推定される。両城跡の瓦が、同じ窯で焼かれた可能性が高く、同一規格であれば、当然、そのような考えになる。仮に、寺沢氏が、天草氏の使用窯を利用したとしても、発注者が違うので、瓦のサイズは全く異なったものになるはずである。前任者のものを、そのまま踏襲することは、あり得ない。どう考えても、徴用説が、理にかなっている、ただし、富岡城跡から出土した類似瓦は、ほとんど灰色の普通瓦という特徴がある。

⑤色瓦が出土したことにより、河内浦城の建物は、一部がカラフルな装いであったと推定される。川崎富人氏が記された『川崎家由緒書』には「邪宗門(赤寺)」の記述がある。これなど、色瓦を使用した建物を示す最たる表現ではないか。城だけでなく、周辺の寺院にも、色瓦の影響があったことが分かる。渡来した宣教師などを通じて、天草氏が積極的に西洋文化を吸収していた証と見る。河浦の中世は、想像以上に華やかであった。富岡城跡から色瓦がほとんど出土しない理由は、この辺にあると思われる。色瓦＝キリスト教と見なされたのかも知れない。

(注)『川崎由緒書』は、富人氏が祖父から聞いた話をまとめたものである。その中に興味深い箇所がある。「川崎家の祖先は武士で、唐津の殿様の家臣であった。唐津の殿様が天草を支配された時、天草に邪宗門(赤寺)がはびこっていたので、それを改宗させるため天草に来て住み着いた」

⑥出土遺物から、河内浦城は、前期と後期に二分される。前期は、14世紀後半から15世紀半ばの頃と推定される。南北朝時代の後半に築城され、戦国時代の前半にかけて、城としての役目を果たしたものと思われる。後期は、16世紀後半で、戦国時代の後半にあたり、郡内も騒乱の時期にあった。

⑦城の縄張りは、館に詰めの城が付随したものと思われる。本体部分は、現在の崇圓寺境内で、ここが、城主の居住区域であろう。前面を流れる一町田川は、水濠の役目を果たした。したがって、現在、河内浦城跡の小山は、詰めの城となる。栖本氏の栖本城跡も円性寺の境内で、河内浦城跡と似たような縄張りとなっている。郡内の中世城跡は、低山が連なる島であるため、このようなタイプの城が卓越したのだろう。

⑧中世城跡の整備は、難しい。近年における県内での本格的な取り組みは、宇土城跡(国指定史跡：宇土市)のみである。県指定史跡の田中城跡(三加和町)や隈部館跡(菊鹿町)は、昭和50年～60年代にかけての取り組みで、主郭部分の遺構明示に留まっている。近世城の場合、石垣の修復や復元という目玉があるが、中世城跡には、これがない。建物復元に至っては、建物を描いた図面も無いので、これを見送る傾向がある。ところが、宇土市では、整備検討委員会を通じて、休憩所を復元建物風に建ち上げる計画を持った。平成12年度の国庫補助事業としてである。そこで、河浦町では、これを参考にして、事業の見直しを行った。

⑨結果として、建物１の望楼を復元した。建物３の検出場所では、復元建物風に休憩所を建設した。この場合、特注品の復元瓦で屋根を葺いた。建物２・４・５は、柱列を並べて、遺構明示とした。

〔今村・大田〕

⑩整備事業の推進は、河浦町農林課とコンサルとの間で進められ、中途から、教育委員会が参加する形となった。平成12年５月に、河内浦城跡整備検討委員会を設置し、検討を重ねた。委員会のメンバーは、今村克彦氏(熊本市整備振興局長)と鶴田倉造氏(郷土史家)、大田幸博氏(県文化課長補佐)の三氏であった。一部、事業の見直しや、本報告書の作成も、委員会での討論が元になった。

〔山下〕

発掘調査の経過

第１次調査

①平成元年の春に、崇圓寺から「裏山の一部を墓地として造成したい」という計画が出された。これを受けて、教育委員会では、裏山が中世城の河内浦城跡であったため、寺側へ事前調査の必要なことを伝えた。ほどなく、寺で予定箇所の雑木を伐採したところ、そこは、帯状の削平地で、瓦片が散布しているのが確認された。これについては、実見した鶴田倉造氏から「地形は、中世城の遺構で、富岡城跡から出土した瓦に非常に類似している」との指摘がなされた（鶴田氏は、昭和50年代に、富岡城の発掘調査に従事しており、その経験に基づいた示唆であった。ただし、鶴田氏や、この話を聞いた大田氏も、当時、中世城跡から瓦が出土するという認識は無く、廃城後の遺物であろうと考えた）。

②教委の指導により、寺から平成元年12月に、工事に伴う発掘調査の届け書が提出された。教委では、平成２年１月18日、県文化課から大田幸博氏（文化財保護主事）と松舟博満氏（嘱託）を迎えて、鶴田氏と共に２日間の試掘を行った。その結果、墓地造成の予定地から空堀の一部が確認され、青磁片や糸切り土師器（杯・皿）が出土した。大田氏は、さらに裏山も踏査を行い、山城としての遺構を確認した。

③調査結果次第では、寺へ造成の設計変更を求めることを前提として、教委では、本調査を行った。試掘と同一メンバーで、同年２月10日から16日まで実施した。続いて３月21日と22日に地形測量を行った。

④〔**検出遺構**〕南側帯曲輪は、段状の地形をなしていた。山付きの北側半分はカットされ、９ｍ幅のテラス状となり、南側半分から上場幅7.3ｍの堀切が検出された。堀切は、短時間で埋め戻されていた。堀切の北壁からは、擂り鉢状の大穴が検出された。ゴミ穴と思われ、多量の遺物が出土した（城時代の情報を今に伝える極めて重要な遺構である）。調査区の北側半分からは、江戸時代の墓穴も見つかった。その数６基。これらについては、崇圓寺時代の遺構である。

〔**出土遺物**〕ほぼ完形の糸切り土師器（杯・皿）が、90点近くも出土した。さらに、青磁、白磁、半磁器、染付け、ベトナム産の大皿が出土した。

〔**城の年代**〕第１次調査では「上限は、15世紀半ば」「下限は16世紀末」と推定された。城域は、崇圓寺境内を含めた範囲と考えられた。調査結果は、河浦町文化財調査報告第１集『河内浦城跡』として発刊している。

第２次調査

①平成３年10月５日～12月２日。教委で実施した。松舟氏を調査主任として、河内浦城跡の本体部分を発掘調査したが、県文化課の大田参事にも調査の助言をお願いした。本体部分は完掘され、大きな成果があった。

②〔**検出遺構**〕柱穴は、175個を数え、５棟の建物跡が復元された。さらに、２列の柵列も見つかった。建物は倉庫と思われるが、望楼や武将の詰め所的なものもある。柵列は、山頂平場の東西両縁に延びている。角礫の集石遺構も検出されたが、中世城から、しばしば検出される遺構である。

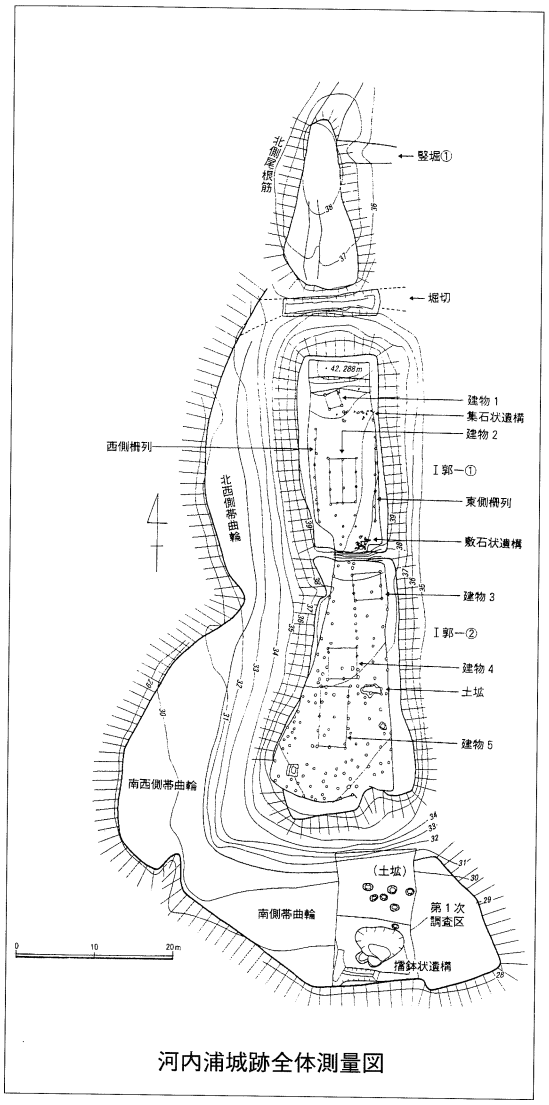
〔**出土遺物**〕染付けの碗と皿は、16世紀後半のものが大半を占める。17世紀に下るものもある。さらに、青磁、白磁、唐津焼の皿（16世紀末から17世紀初頭）と擂鉢、陶器皿（17世紀初頭）、瀬戸・美濃陶器皿、糸切り土師器、備前甕、砥石などが出土した。

〔**城の年代**〕本体部分は、16世紀中葉から後半で、一部、17世紀初頭にかかることが分かった。河内浦城の廃城は、元和元年（1615）の一国一城令であった可能性が強い。

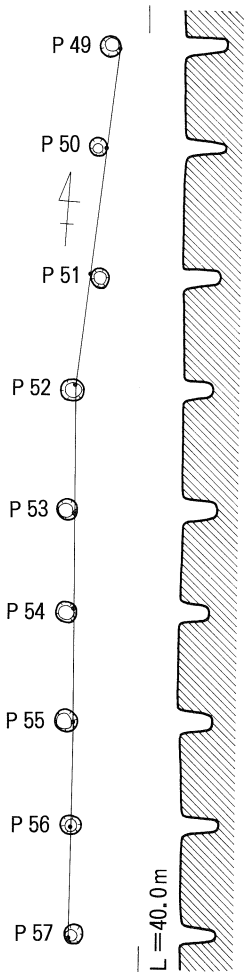
③調査地の変遷（調査成果と鶴田氏の推論）　河内浦城時代→築城（15世紀半）～廃城（1615年）。河内浦郡代所時代→1615年～1641年。崇圓寺時代→1645年～現在。

④調査結果は、河浦町文化財調査報告第２集『河内浦城跡Ⅱ』として発刊している。

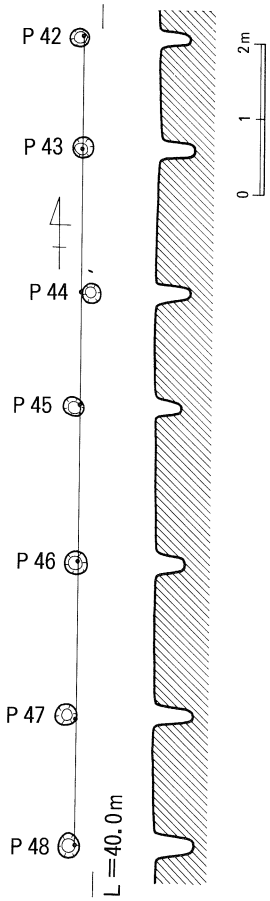
〔山下〕



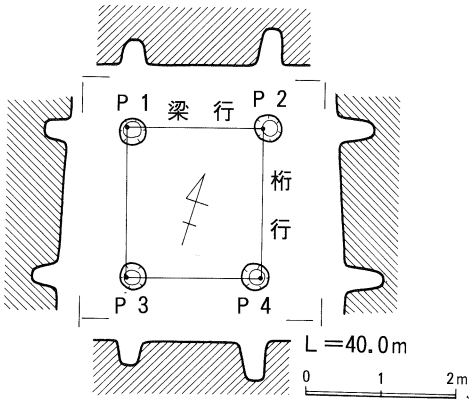
河内浦城跡全体測量図



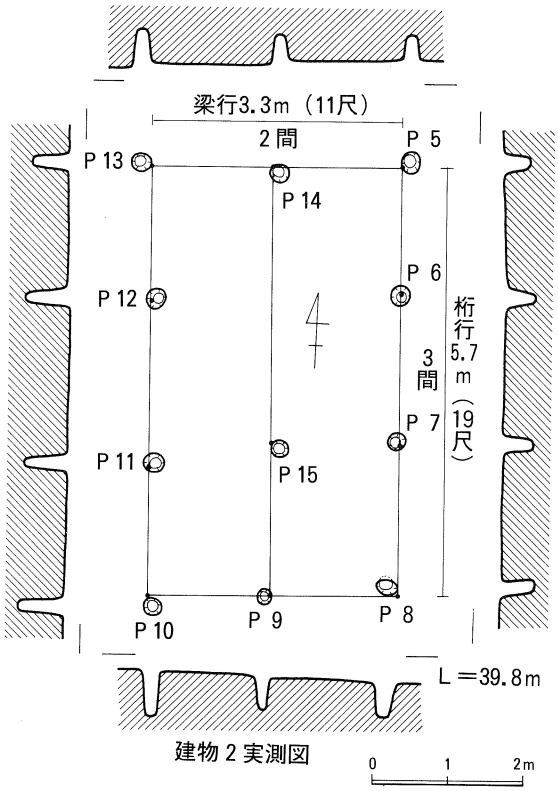
西側柵列実測図



東側柵列実測図

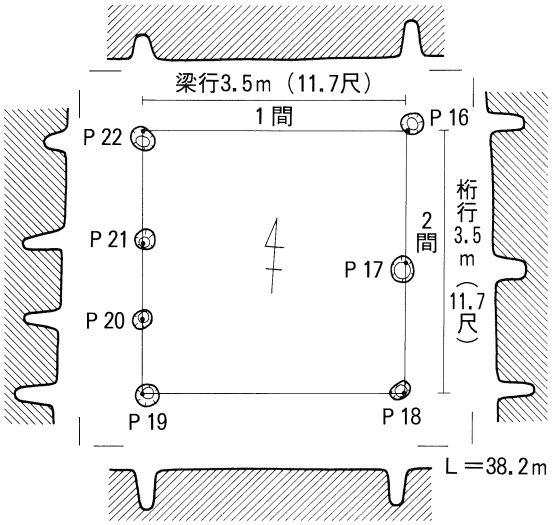


建物1実測図
桁行：1間　2.0m（6.7尺）
梁行：1間　1.8m（6.0尺）

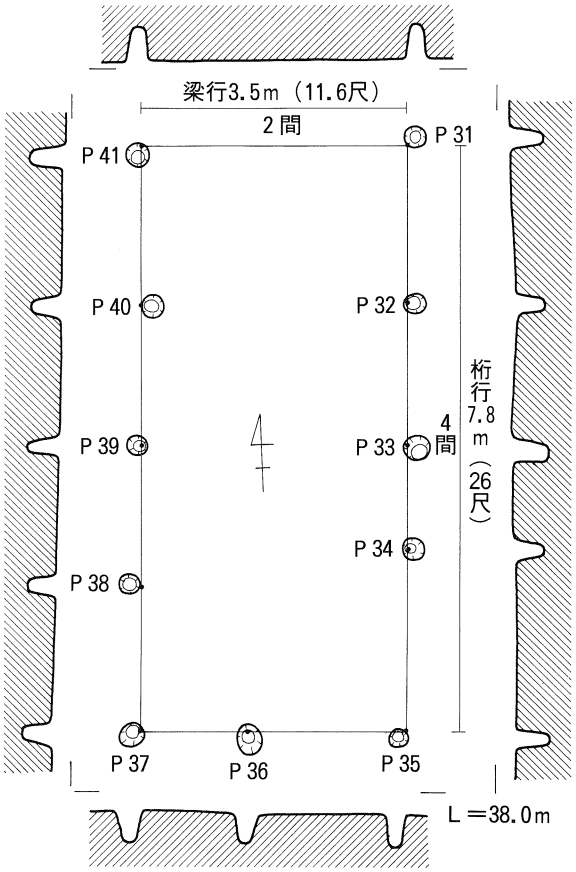


建物2実測図

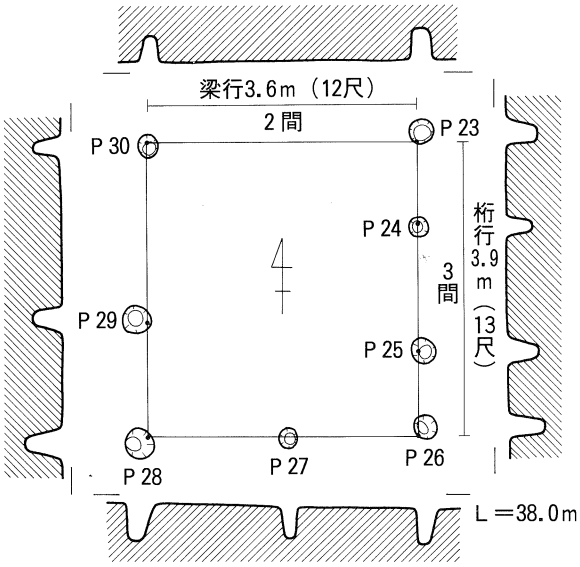
第12図　第2次調査検出遺構①



建物3実測図



建物5実測図



建物4実測図

第13図　第2次調査検出遺構②

建物1

No.	長径	短径	深さ
P 1	37	35	34
P 2	37	36	46
P 3	39	37	50
P 4	37	35	32

建物2

No.	長径	短径	深さ
P 5	29	23	32.7
P 6	28	25	33.5
P 7	24	21	40.8
P 8	32	24	43.2
P 9	21	19	41.7
P 10	24	22	58.7
P 11	27	26	58.2
P 12	29	23	54.1
P 13	26	25	45.2
P 14	25	23	35.5
P 15	23	21	35.0

建物3

No.	長径	短径	深さ
P 16	29	26	46
P 17	36	31	41
P 18	29	22	48
P 19	33	29	53
P 20	26	24	47
P 21	29	25	52
P 22	35	29	28

建物4

No.	長径	短径	深さ
P 23	35	31	40
P 24	27	25	33
P 25	35	32	39
P 26	33	32	47
P 27	29	25	41
P 28	42	38	47
P 29	38	36	37
P 30	31	27	35

建物5

No.	長径	短径	深さ
P 31	31	28	42
P 32	29	26	37
P 33	36	32	45
P 34	30	29	38
P 35	26	23	42
P 36	42	33	30
P 37	34	33	39
P 38	29	27	40
P 39	28	24	41
P 40	33	29	40
P 41	31	29	44

東側柵列

No.	長径	短径	深さ
P 42	23	22	40
P 43	27	26	42
P 44	28	24	47
P 45	28	23	34
P 46	33	30	37
P 47	30	28	51
P 48	35	28	50

西側柵列

No.	長径	短径	深さ
P 49	28	25	55
P 50	25	24	55
P 51	29	23	49
P 52	30	27	38
P 53	30	25	44
P 54	29	27	36
P 55	32	30	44
P 56	26	24	48
P 57	26	24	46

第8表　建物跡柱穴計測表

第１・２次調査の出土遺物

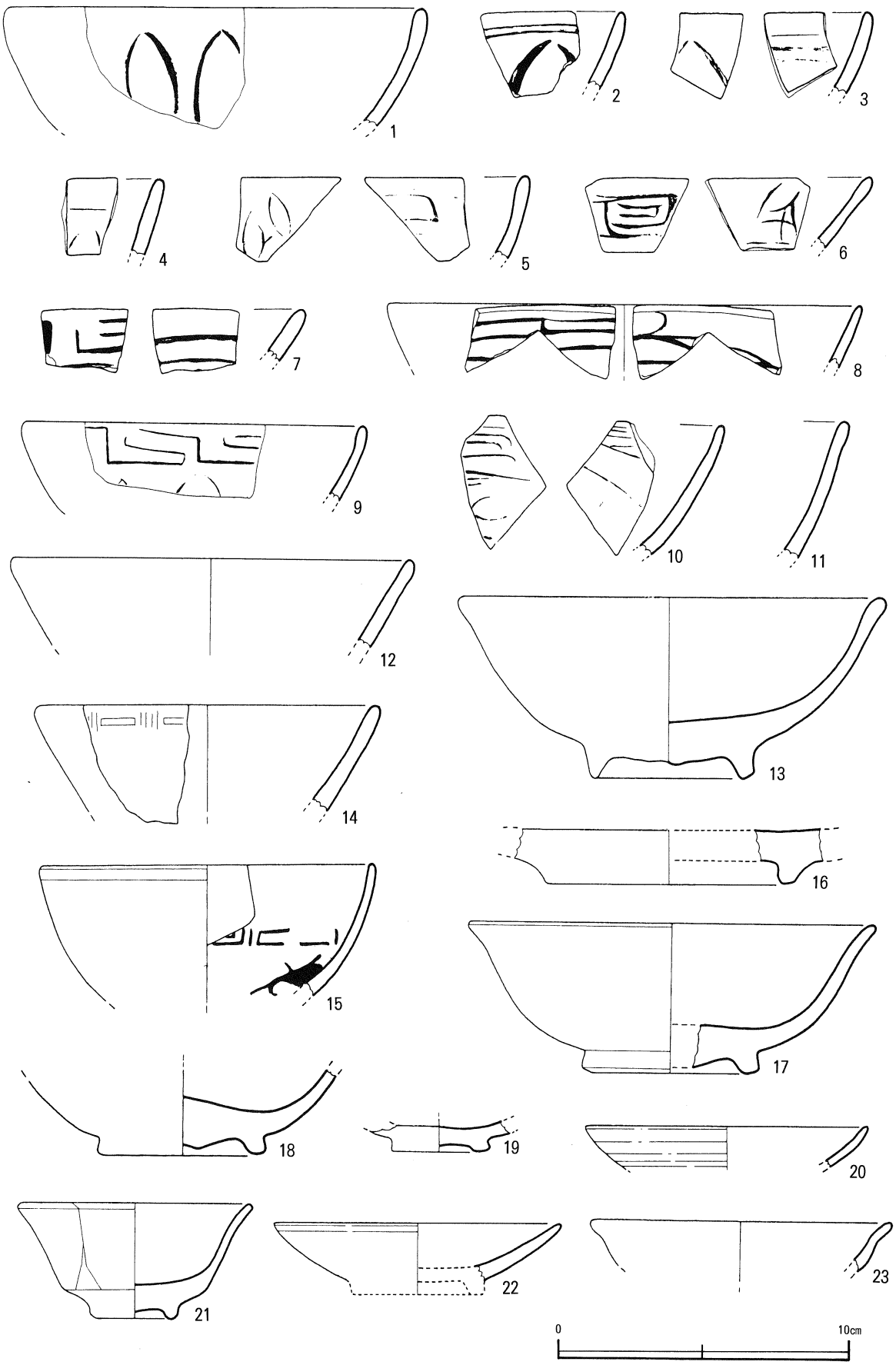
①陶磁器

〔石工・溝口・大田〕

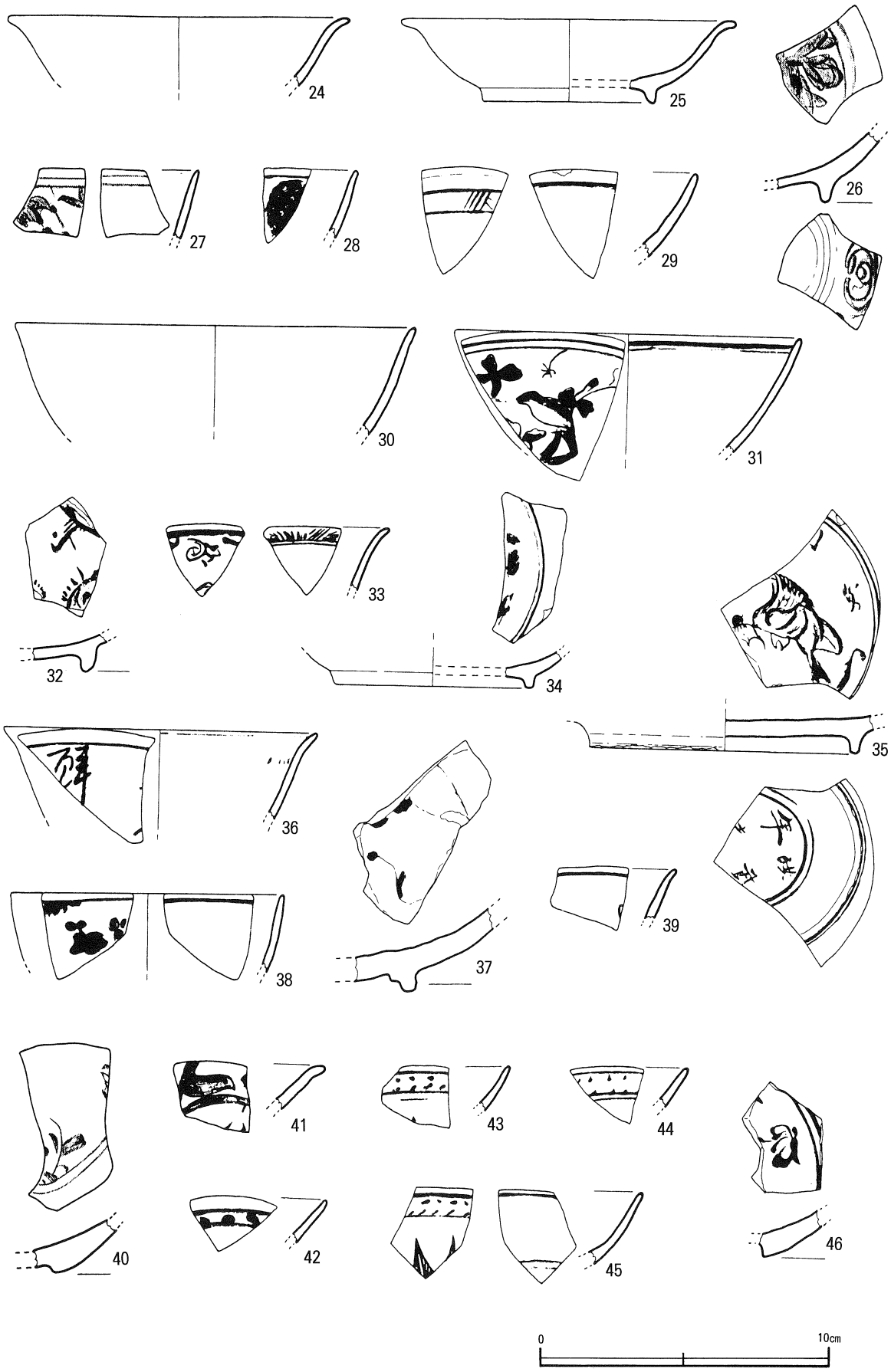
過年度に出土した遺物については、大橋康二氏の指導を受けて、再度、整理を行った。結果は、一覧表にまとめたが、遺物番号横に「＊」印がある遺物は、新しい所見である。青磁と白磁は、いずれも中国からの輸入品である。陶器の中には、ベトナム産が混じっている。

	No.	器　種	年　代	産　地	特　筆　事　項
＊	1	青磁碗	14C中～15C初	竜泉窯系	ヘラ彫。蓮弁文様。
	2	青磁碗	14C後～15C初	竜泉窯系	ヘラ彫。２条の界線。蓮弁文様。
＊	3	青磁碗	14C後～15C中	竜泉窯系	ヘラ描き。蓮弁文様。
＊	4	青磁碗	14C後～15C中	竜泉窯系	ヘラ描き。蓮弁文様。
＊	5	青磁碗	14C後～15C中	竜泉窯系	ヘラ描き。ヘラ描き。外器面に雷文帯文様。
＊	6	青磁碗	14C後～15C中	中国産	
	7	青磁碗	14C後～15C中		釉下に横位の刻線。
	8	青磁碗	14C後～15C中		内器面に横位の曲線文様。外器面に横位の直線文様。
＊	9	青磁碗	14C後～15C中	竜泉窯系	ヘラ描き。外器面に雷文帯文様。
＊	10	青磁碗	14C後～15C中	中国産	
＊	11	青磁碗	14C後～15C中	竜泉窯系	端反形。内外器面に陰刻文。
＊	12	青磁碗	14C後～15C中	竜泉窯系	焼成不良。
	13	青磁碗	15C	竜泉窯系	復元口径14.8cm・器高6.3cm。釉下に薄い陽刻文様。
	14	青磁碗	15C後～16C		釉下にかすかに雷文帯文様(判子によるスタンプ)。
	15	青磁碗	15C末～16C前		内器面に雷文帯文様(型打ち)。下位に文様。
＊	16	青磁皿	14C後～15C前	竜泉窯系	
	17	白磁碗	16C		復元口径14cm・器高5.1cm。高台の端部はヘラ削り。
	18	白磁碗	16C		底部中央が肉太。
	19	白磁皿	15C頃	中国産	小皿。
	20	白磁皿	15C頃	中国産	小皿。
	21	白磁坏	15C		器形は八角形。
	22	白磁皿	15C中		外器面に二重のロクロ痕。
	23	白磁皿	16C		
	24	白磁皿	16C		
	25	白磁皿	16C		復元口径11.5cm・器高2.9cm。
＊	26	染付碗	16C前～中	景徳鎮系	蓮子形か？内底面は花文か？外器面腰部に如意頭繋ぎ文様？
＊	27	染付碗	16C後	景徳鎮系	外器面に草花文様。
＊	28	染付碗	16C後		外器面に花弁文様。
	29	染付碗	16C後		外器面に斜線文様。
＊	30	染付碗	16C後	景徳鎮系	釉下に薄いロクロ痕。
	31	染付碗	16C後		外器面に木枝に止まる鳥図文様。
	32	染付碗	16C後		内底面に文様。
	33	染付碗	16C		内器面に斜線文様。外器面に文様。
	34	染付碗	16C		内底面に文様。器面に太目の貫入。
	35	染付碗	16C		内底面に樹下人物文様(座像)。外底面の高台内に文字。
	36	染付碗	16C後～17C初		外器面に文字。
	37	染付碗	16C後～17C初		内底面に文様。
	38	染付碗	16C末～17C初		外器面に小葉文様。
	39	染付碗	17C		器面上位に界線。
＊	40	染付皿	16C前～中	景徳鎮系	碁笥皿。魚藻文様。内底面の魚文は白土を盛り上げて装飾。
	41	染付皿	16C後	中国産	外器面に肉太の文様。
	42	染付皿	16C後		碁笥皿。外器面に太目の点描き文様。
	43	染付皿	16C中～末		碁笥皿。外器面に細目の点描き文様。
	44	染付皿	16C中～末		碁笥皿。外器面に細目の点描き文様。
	45	染付皿	16C中～末		碁笥皿。外器面に細目の点描き文様と波状文様。
	46	染付皿	16C中～末		碁笥皿。内底面に文様。
	47	染付皿	16C後		碁笥皿。復元口径10.2cm・器高2.5cm。
	48	染付皿	16C末～17C初	景徳鎮系	内器面に型打ちによる陽刻文様。
＊	49	陶　器	12C～14C		壺か？　焼成不良のため、釉種不明。
＊	50	陶　器	12C～14C	中国産	盤か？褐釉か黄釉？
＊	51	陶器皿	16C	瀬戸美濃焼	復元口径11.4cm・器高2.3cm。外器面に２条の稜線。
	52	陶器皿	16C	唐津焼	
	53	陶器皿	16C末～17C初	唐津焼	
	54	陶器皿	17C初		内底面に渦巻き痕。
	55	陶器皿	17C初		復元口径11.2cm・器高3.5cm。外器面に３条の薄い稜線。
	56	陶器皿	17C初		復元口径11.5cm・器高4.6cm。外器面に３条の薄い稜線。
	57	磁　器	18C後～19C中	天草産(?)	蓋。
＊	58	磁　器	――――	中国産(?)	鉄釉か？
	59	陶　器	1590～1630		
	60	陶器皿	1590～1630	唐津焼	

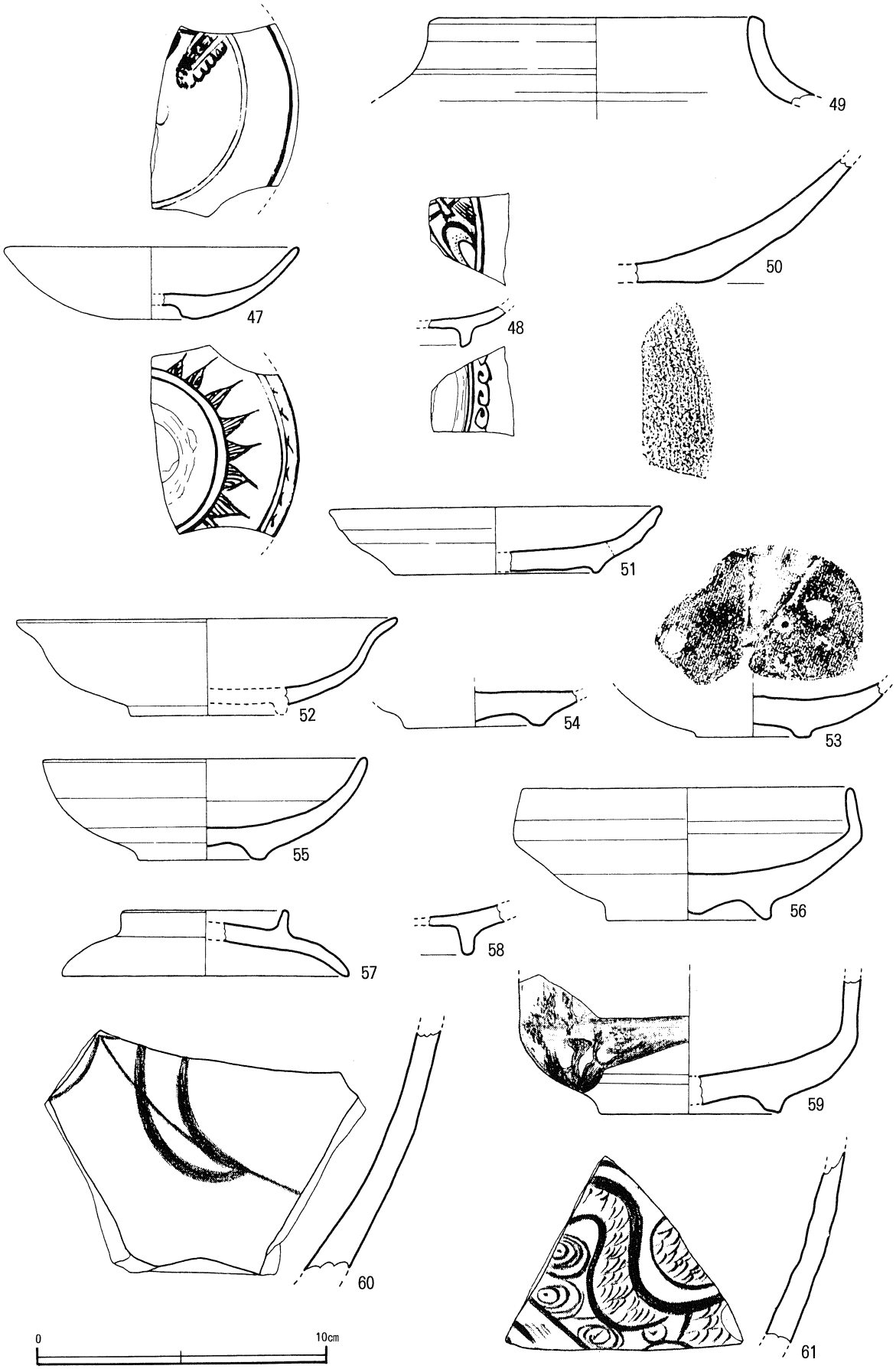
第９表　出土遺物観察表①



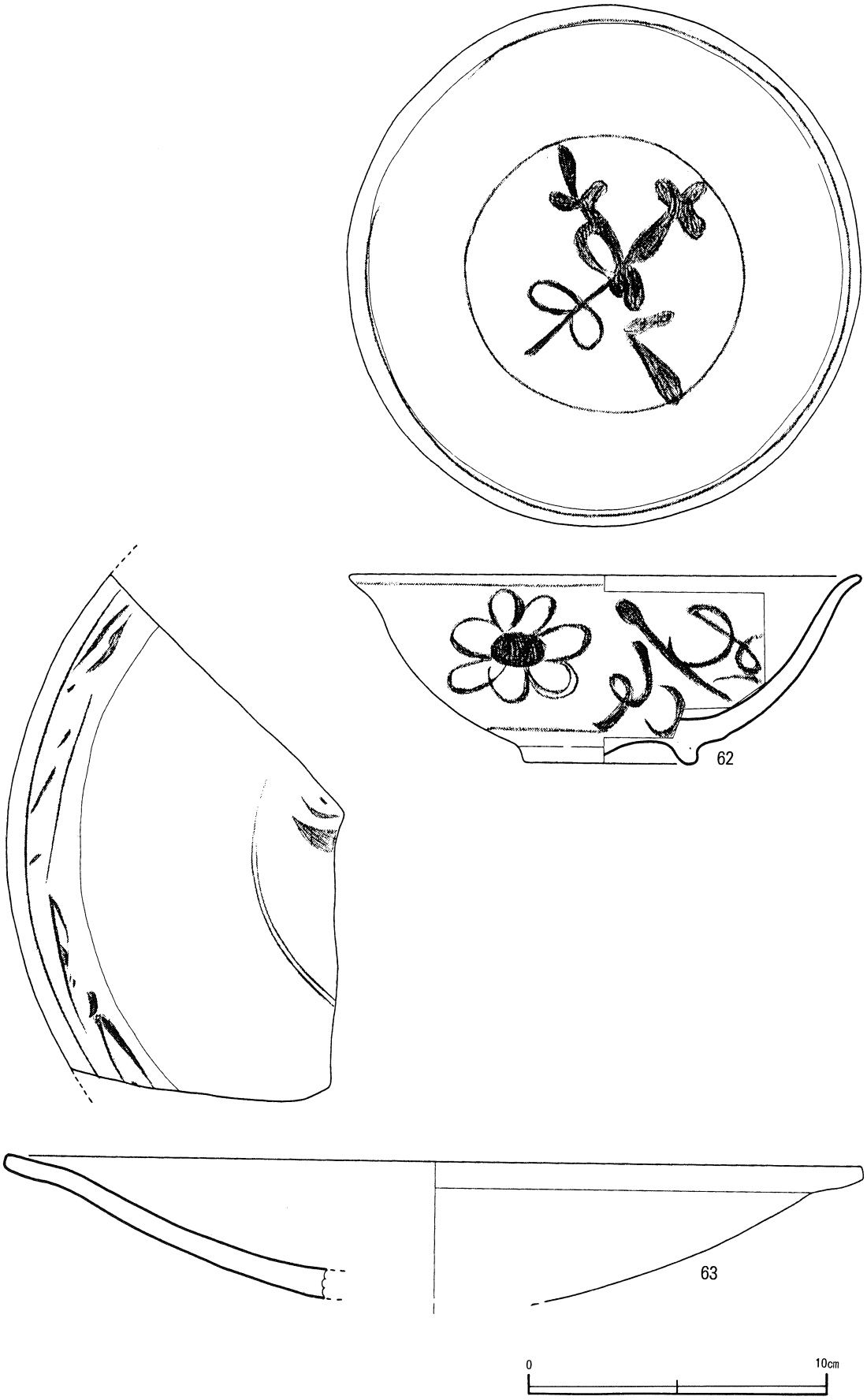
第14図　出土遺物実測図①



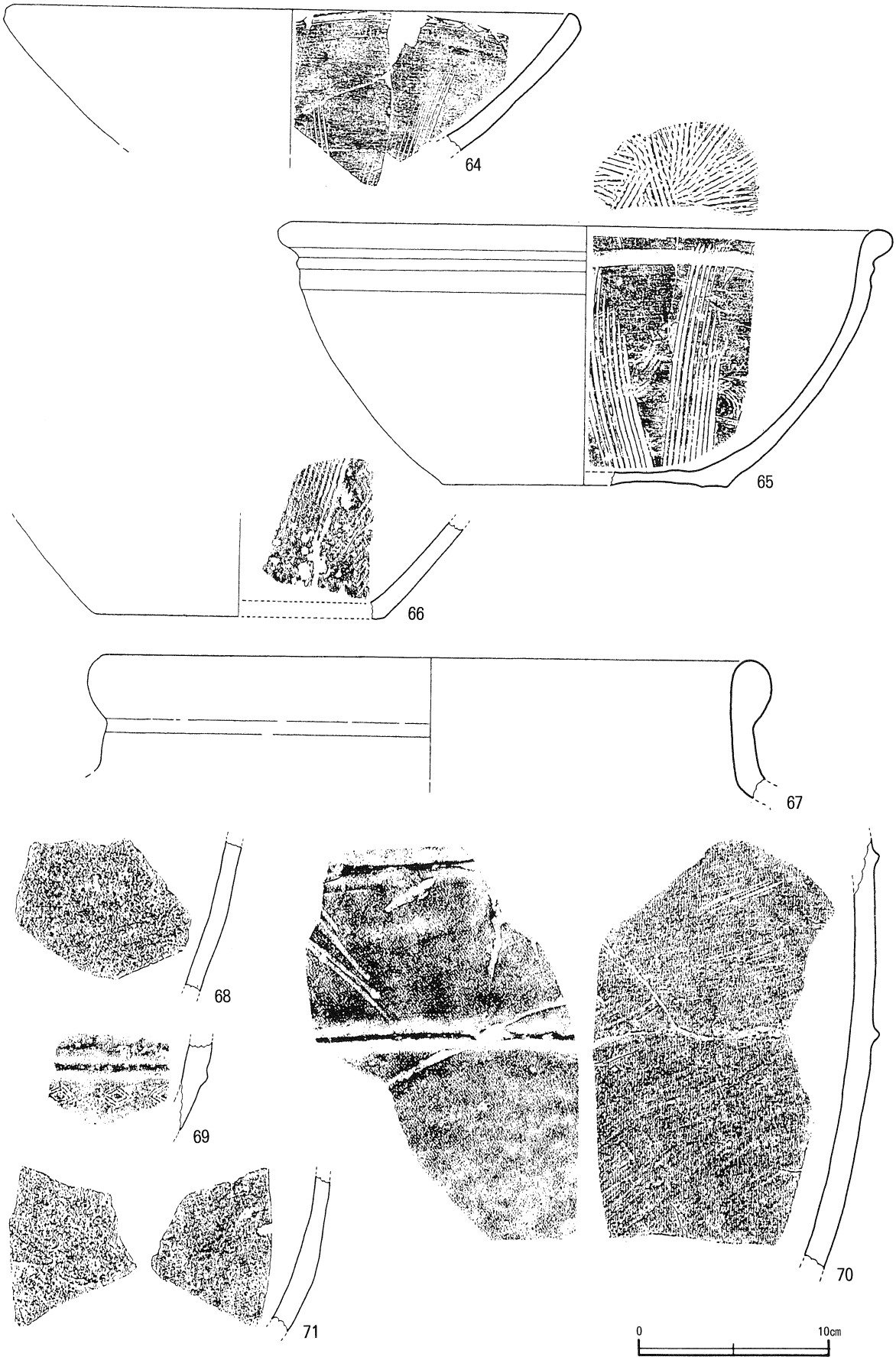
第15図　出土遺物実測図②



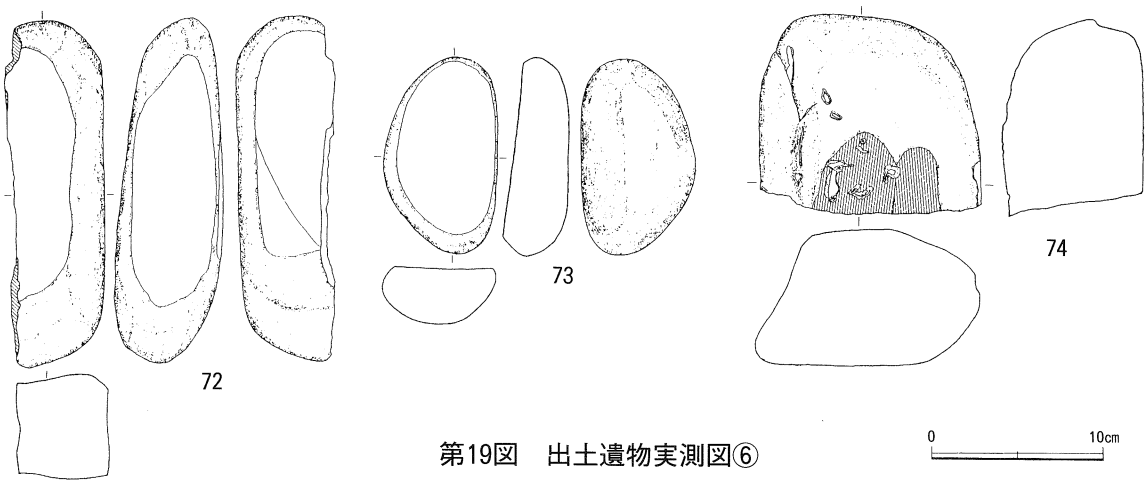
第16図　出土遺物実測図③



第17図　出土遺物実測図④



第18図　出土遺物実測図⑤



第19図　出土遺物実測図⑥

No.	器　種	年　代	産　地	特　筆　事　項
61	磁　器	――――		内器面に曲線文様と蛇の目文様。瑠璃釉が分厚く施釉。
62	磁器碗	16C		半磁器。内底面に筆描きによる十字華。 外器面は筆描きによる花唐草文様。
63	磁器皿	――――	ベトナム産	大皿。復元口径28.6cm。内器面にモチーフ不明の文様。
64	擂　鉢	15C末～16C	唐津焼	復元口径30.4cm。条線の一単位は6本。
65	擂　鉢	15C末～16C		口径32.5cm。体部は内弯する。条線の一単位は9本。
66	擂　鉢	15C～16C(?)		瓦質土器。条線の一単位は9本まで確認される。
67	甕	15C～16C	備前焼	復元口径36cm。
68	壺	15C～16C(?)	備前焼	
69	火　舎	15C～16C(?)		突帯下に三重の菱形スタンプ。
70	火　舎	15C～16C(?)		瓦質土器。
71	壺	15C～16C(?)	常滑焼	
72	砥　石	――――		長さ22.8cm。3面使用。
73	砥　石	――――		川原石(円礫)を使用。
74	砥　石	――――		正面部のみ使用。

第10表　出土遺物観察表②

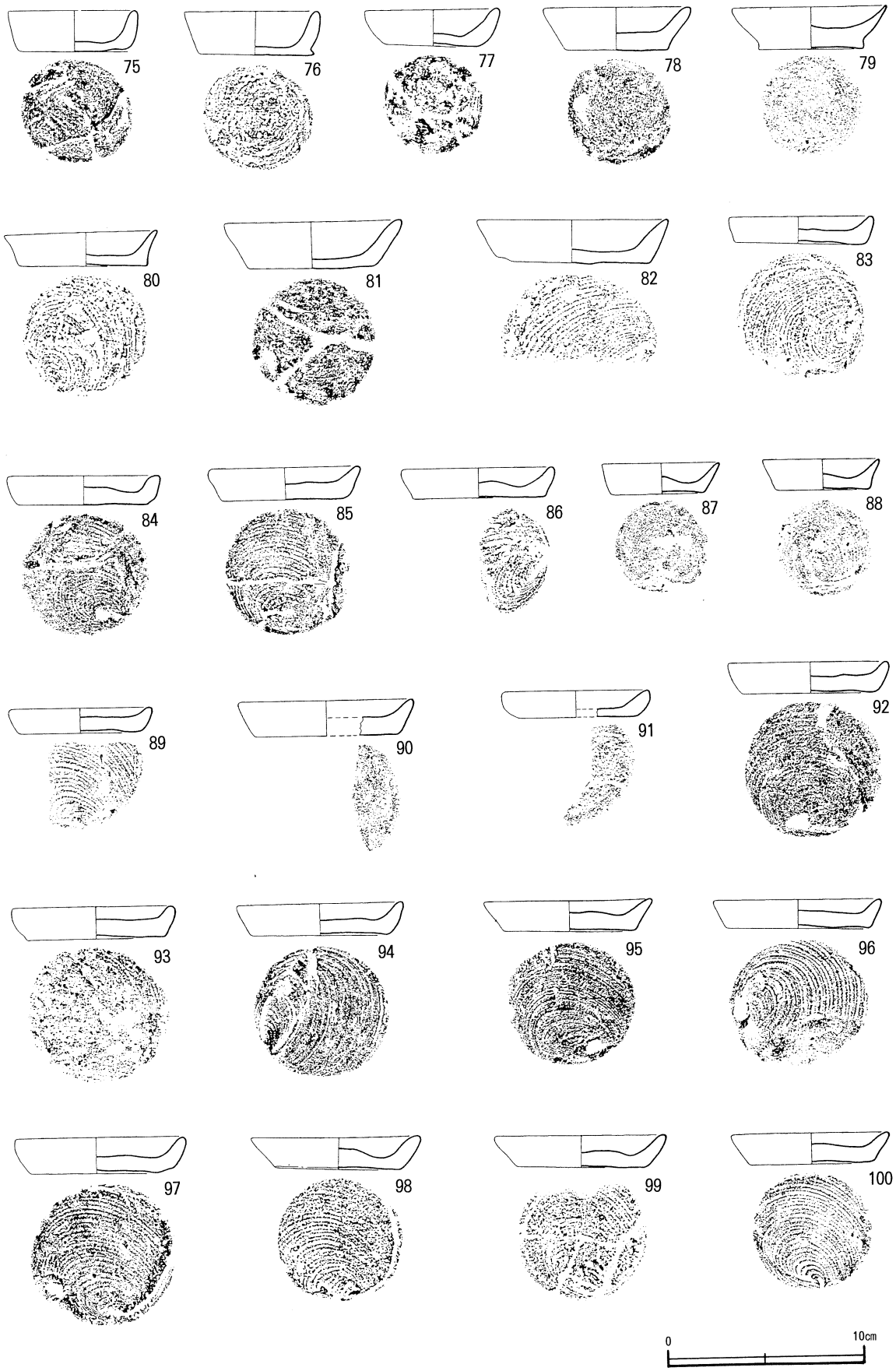
②土師器

多量に出土しており、法量をまとめた。形状によりａ～ｓに分類される。

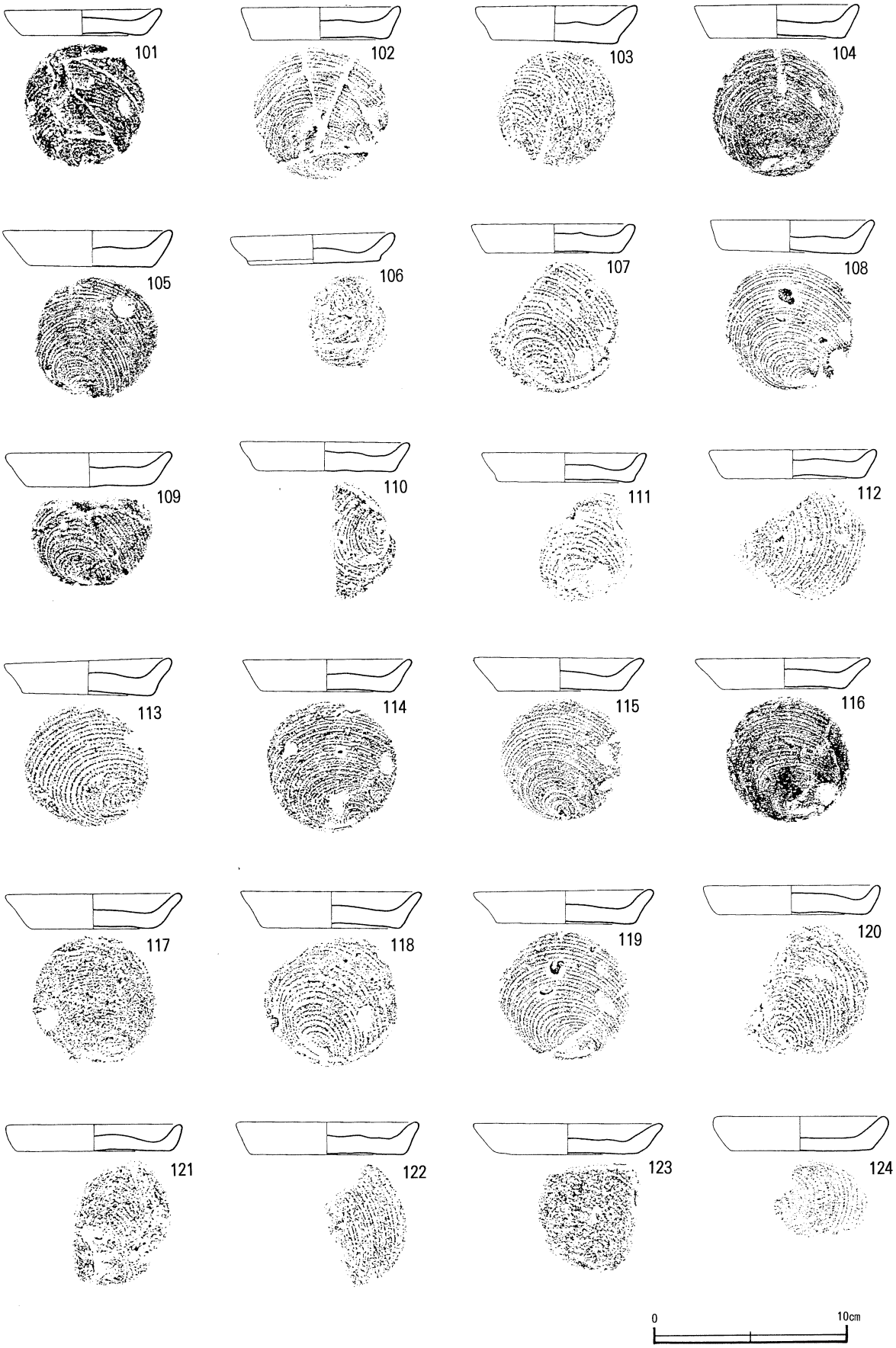
種別	No.	口径	底径	器高	種別	No.	口径	底径	器高	種別	No.	口径	底径	器高	種別	No.	口径	底径	器高
a	75	6.6	5.8	2.1	d	103	8.3	6.5	2.0	g	130	12.0	8.8	3.2	m	157	11.6	8.1	3.0
	76	6.8	5.8	2.3		104	8.5	7.0	1.8		131	12.5	8.6	3.1		158	11.7	8.2	3.2
	77	6.8	4.8	2.0		105	8.8	6.9	1.9		132	12.5	8.6	3.1		159	11.6	8.0	3.1
	78	7.4	5.2	2.2		106	8.4	6.7	1.5		133	13.2	9.5	2.8		160	11.9	8.0	3.2
	79	8.1	5.5	2.2		107	8.4	6.8	1.5	h	134	11.6	7.2	3.0	n	161	11.9	8.6	2.7
b	80	7.8	6.5	1.9		108	8.5	6.9	1.8		135	11.6	7.9	3.3	o	162	12.1	7.9	2.8
	81	8.9	6.4	2.4		109	8.5	6.4	1.8		136	11.9	8.1	3.2		163	12.1	7.8	3.1
	82	9.7	7.6	2.2		110	8.6	6.9	1.5		137	12.1	7.9	3.2	p	164	11.7	8.3	3.1
c	83	7.4	6.5	1.5		111	8.5	6.9	1.5		138	12.3	8.0	3.4		165	11.6	8.1	2.9
	84	7.7	6.4	1.5		112	8.6	7.2	1.5		139	11.7	7.8	3.4		166	12.0	8.0	3.1
	85	7.7	6.4	1.7		113	8.6	6.7	2.0		140	11.7	7.5	2.6		167	12.2	8.7	3.4
	86	7.8	6.7	1.5		114	8.7	6.7	1.7		141	11.3	7.6	2.8		168	12.0	8.3	3.1
	87	6.0	4.8	1.6		115	8.7	6.4	1.8	i	142	11.6	7.8	2.6		169	12.3	8.0	3.4
	88	6.0	4.9	1.6	e	116	9.0	6.5	1.6		143	11.8	8.0	2.6		170	12.0	8.8	3.0
	89	7.3	6.3	1.3		117	9.1	6.4	1.8		144	12.0	8.4	2.8		171	12.8	8.2	3.3
	90	9.1	7.5	1.8		118	9.4	7.2	1.9		145	12.0	7.8	2.5		172	11.6	8.3	3.1
	91	7.6	6.0	1.4		119	9.2	7.1	1.9	j	146	12.0	8.2	3.1	q	173	12.9	9.4	2.9
d	92	8.1	6.8	1.6		120	9.0	7.6	1.5		147	12.4	8.0	3.3		174	13.2	9.7	3.0
	93	8.2	7.0	1.6		121	9.0	8.0	1.5		148	12.0	8.1	3.2		175	13.6	9.8	2.7
	94	8.4	7.0	1.7		122	9.3	7.8	1.7	k	149	11.5	7.0	3.1		176	13.6	10.0	2.7
	95	8.5	6.6	1.6		123	9.7	7.0	1.6		150	13.7	7.8	3.7		177	13.8	10.5	3.0
	96	8.5	7.2	1.5		124	9.1	7.4	1.8	l	151	10.3	7.0	2.9		178	13.0	10.0	2.9
	97	8.6	6.5	1.9		125	9.2	7.0	1.9		152	11.2	7.7	2.9		179	13.5	9.2	3.0
	98	8.6	6.3	1.7		126	8.9	6.8	1.9		153	11.1	6.9	2.9	r	180	14.2	10.3	2.5
	99	8.6	6.4	1.7		127	9.3	8.0	2.0	m	154	11.4	8.4	3.0		181	14.4	10.2	2.8
	100	8.0	6.1	1.6	f	128	11.0	8.0	1.6		155	11.4	8.5	3.0		182	14.9	11.0	3.0
	101	8.1	6.3	1.4	g	129	11.2	8.0	3.0		156	11.5	8.0	3.0	s	183	10.1	9.3	2.6
	102	8.2	7.0	1.7															

〔単位：cm〕

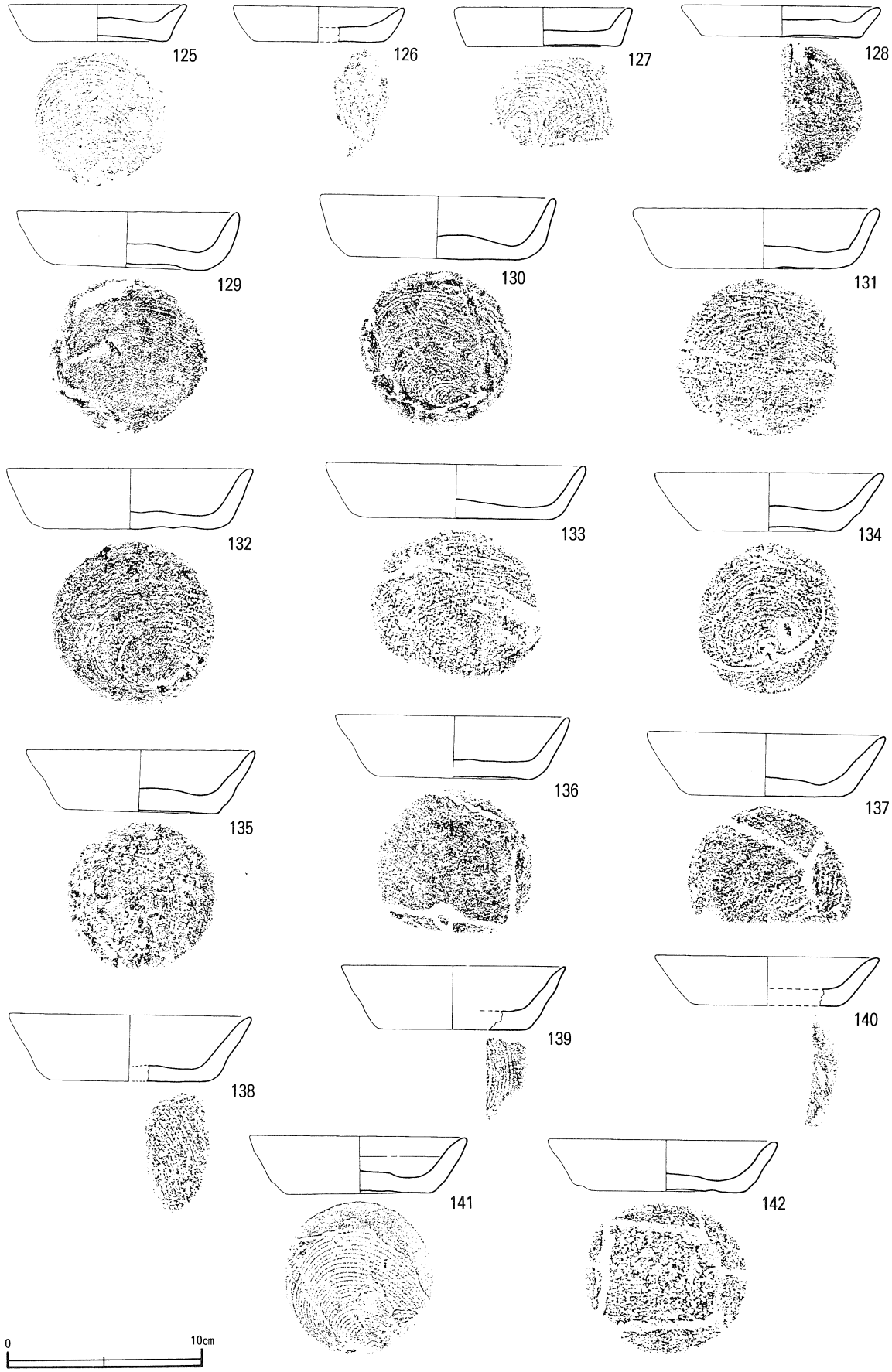
第11表　土師器法量表



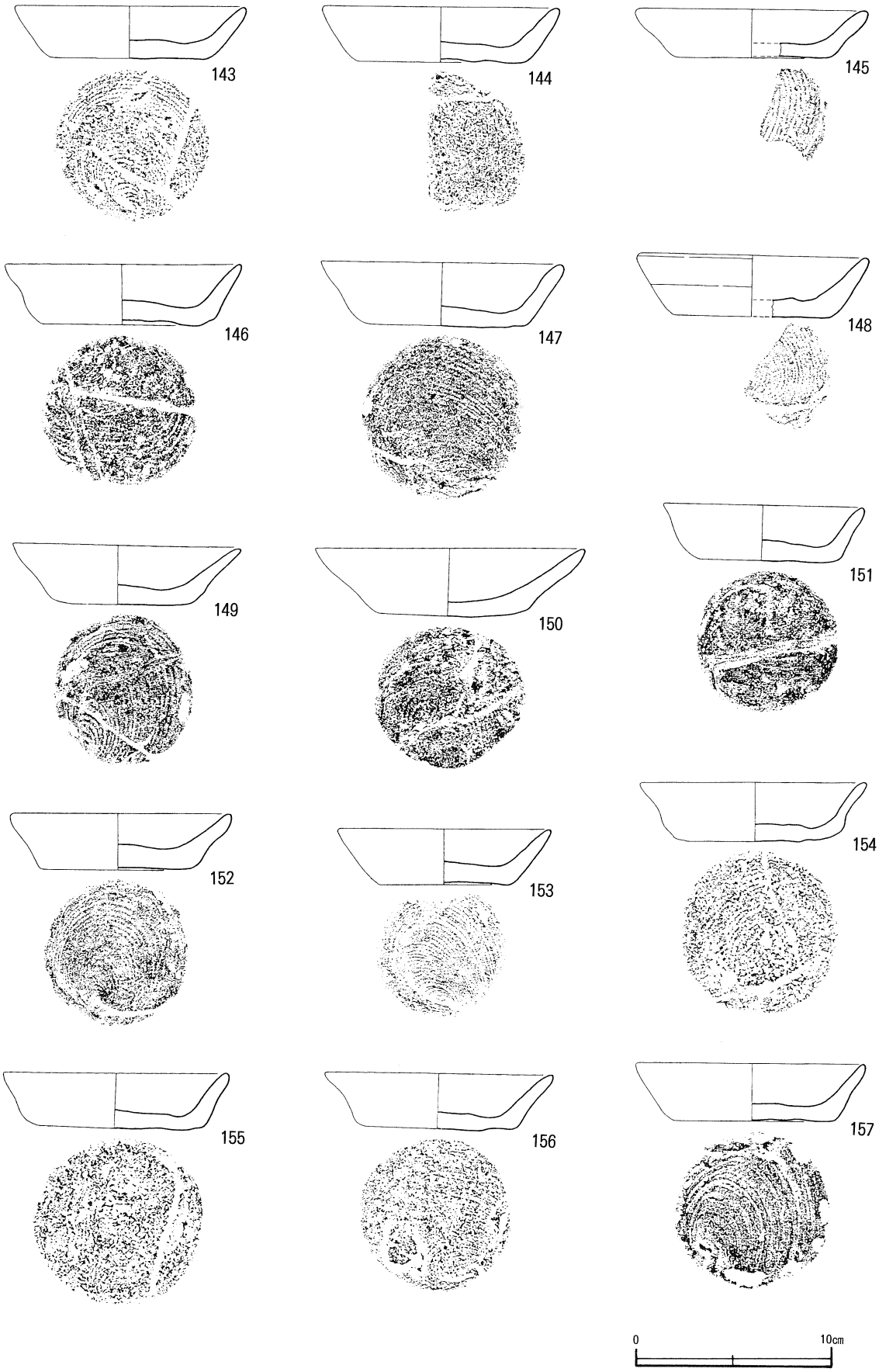
第20図　出土遺物実測図⑦



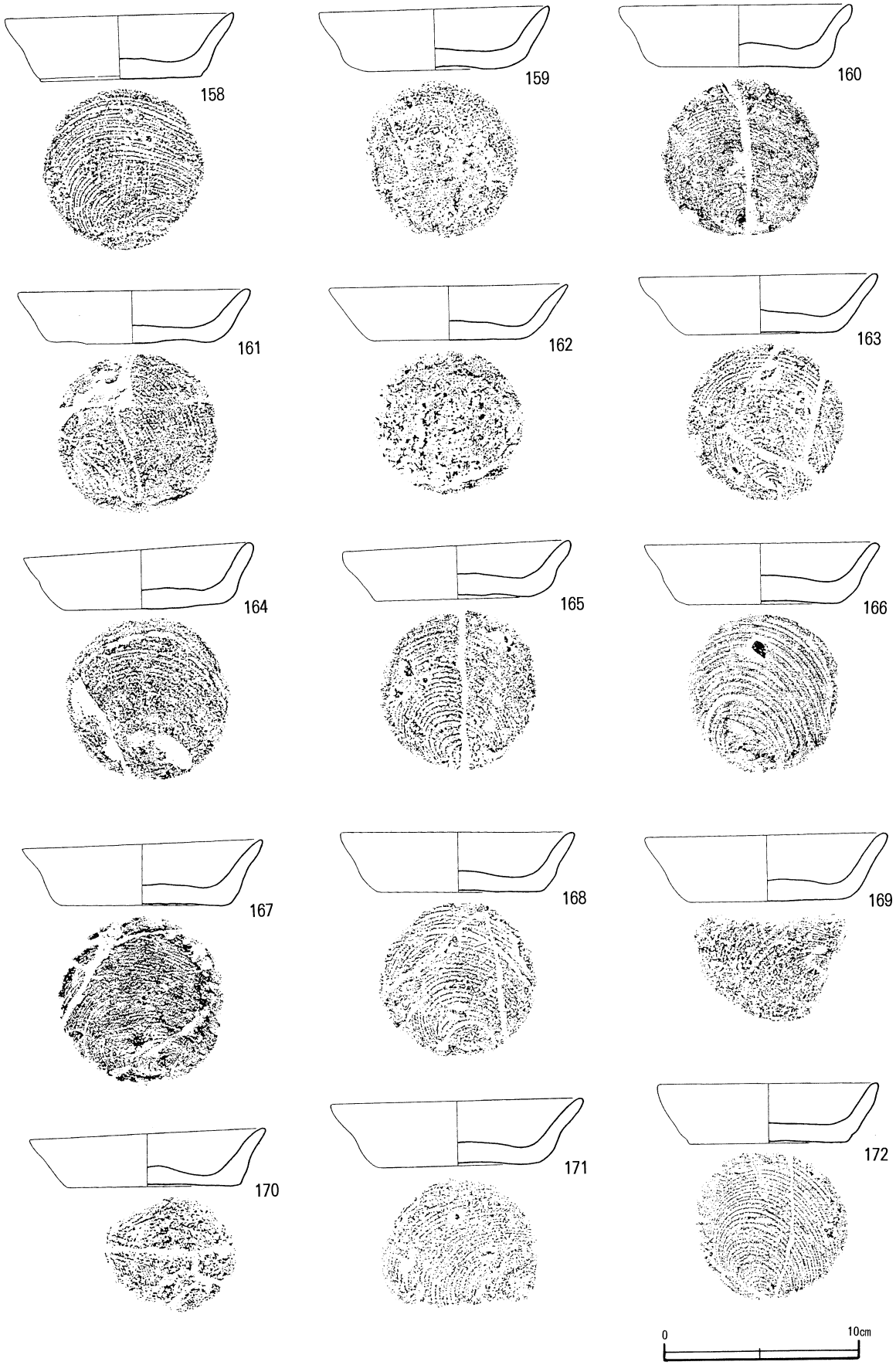
第21図　出土遺物実測図⑧



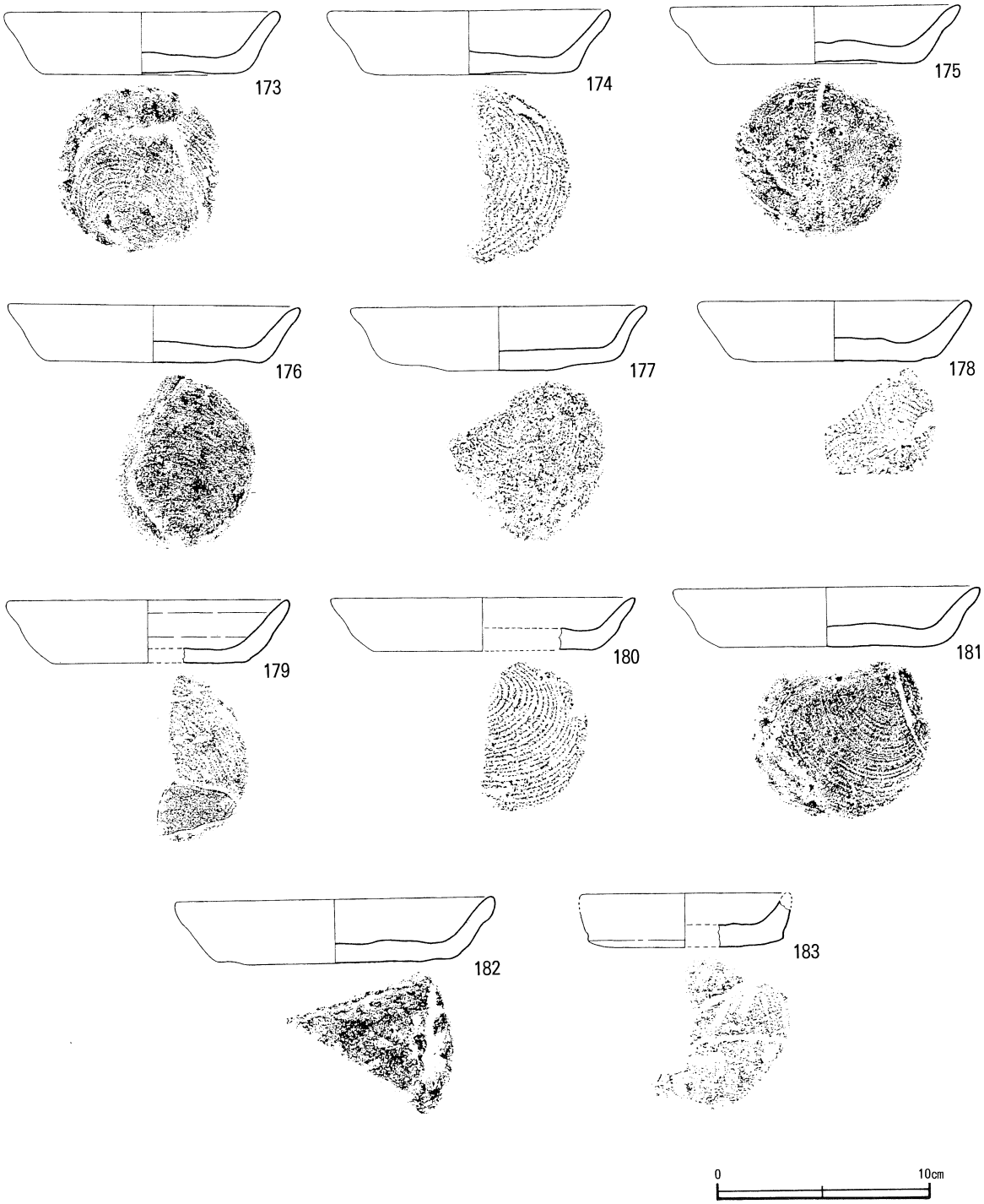
第22図　出土遺物実測図⑨



第23図　出土遺物実測図⑩



第24図　出土遺物実測図⑪



第25図　出土遺物実測図⑫

《付論》自然科学分析調査報告

河浦町　河内浦城跡における蛍光X線の分析

株式会社　古環境研究所

1．試料

試料は、中世～近世とされる瓦（1996・2000）および天草陶石（比較試料）の計３点である。

2．分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子㈱製，JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。以下に分析の手順を示す。

①試料を流水中で研磨洗浄

②絶乾後、分析装置の固定試料ステージに固定

③測定時間300秒、照射径20㎜、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

3．分析結果

各元素の定量分析結果(wt%)を表１および図１に示し、図２にCa-K分布図およびSr-Rb分布図を示す。

4．考察

分析の結果、瓦(1996)と瓦(2000)は、ほぼ同様の元素組成を示しており、とくに大きな差異は認められない(図１)。また、土器の産地同定を行う際の指標の一つとされているCaO-K2O分布図(図２)でも、両者は近似した構成比を示している。これらのことから、瓦(1996)と瓦(2000)はほぼ同様の系統のものと考えられるが、微量元素のSrOの含量は瓦(1996)の方が高い値を示していることから、現段階では確定的なことは言えない。

天草陶石の結果をみると、SiO2、K2O、Fe2O3の含量が瓦とは明瞭に異なっており、とくにFe2O3の含量は瓦の約十分の一とかなり低い値である。また、微量元素のSrOの含量も極めて低い値であり、瓦の結果とは明瞭に異なっている。これらのことから、今回の瓦の主要な原料として天草陶石が利用されていた可能性は考えにくい。

今後、試料数を増やすなど、基礎的なデータを蓄積することで、瓦の系統に関する詳細な情報が得られるものと期待される。

〔文献〕 三辻利一　(1999)元素分析による須恵器の産地推定．考古学と自然科学(4)．同成社，294-313

表１　河浦町、河内浦城跡における蛍光X線分析結果

地点・試料 原子No.	化学式	瓦 1996	瓦 2000	陶石
11	Na_2O	0.85	0.69	0.10
12	MgO	1.34	0.98	0.25
13	Al_2O_3	19.37	18.10	20.37
14	SiO_2	65.39	67.79	73.30
19	K_2O	3.22	2.68	5.12
20	CaO	0.45	0.52	0.04
22	TiO_2	1.06	1.14	

地点・試料 原子No.	化学式	瓦 1996	瓦 2000	陶石
23	V_2O_5	0.03	0.04	
25	MnO	0.11	0.10	0.01
26	Fe_2O_3	8.06	7.86	0.79
37	Rb_2O	0.02	0.02	0.02
38	SrO	0.03	0.01	0.00
40	ZrO_2	0.07	0.06	0.01

単位：wt(%)

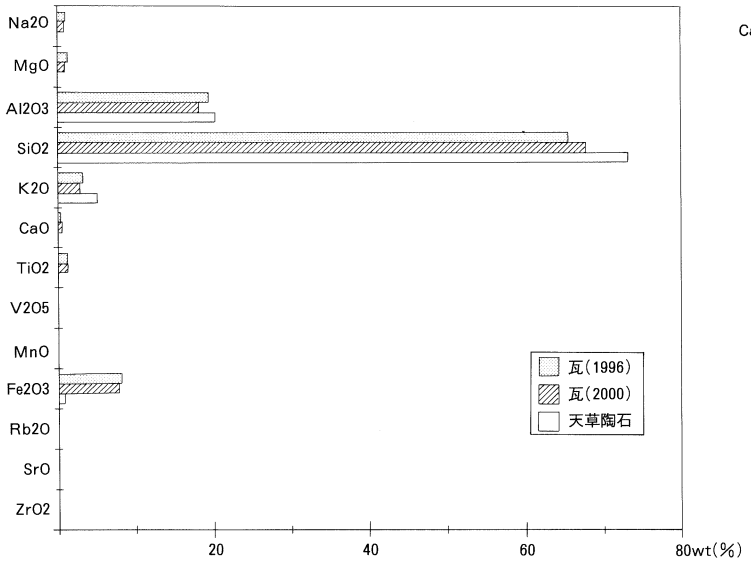
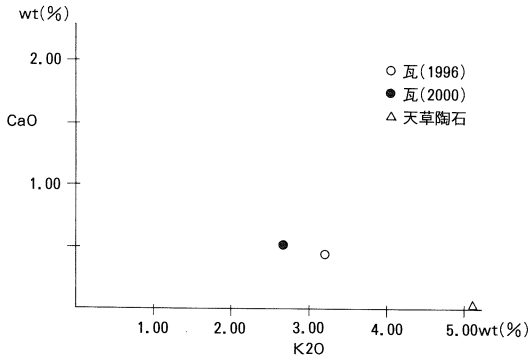
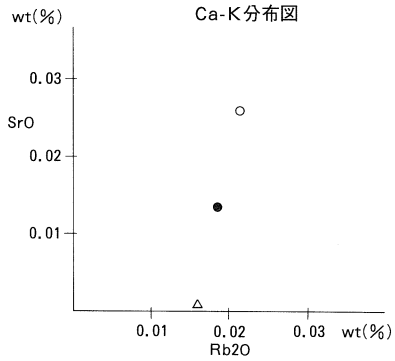


図１　河内浦城跡から出土した瓦と天草陶石の蛍光X線分析結果



Ca-K分布図

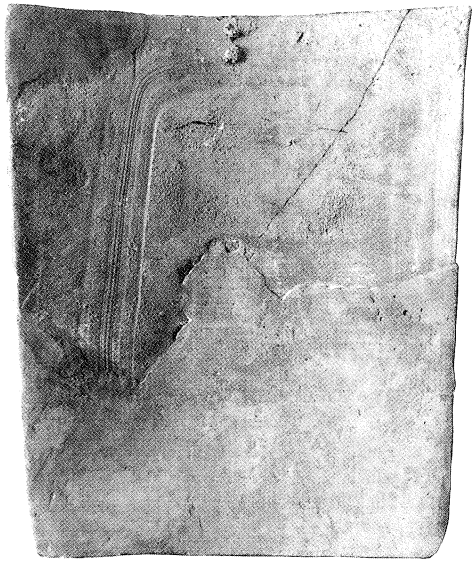


Sr-Rb分布図

図２　河内浦城跡から出土した瓦と天草陶石のCa-K分布図とSr-Rb分布図

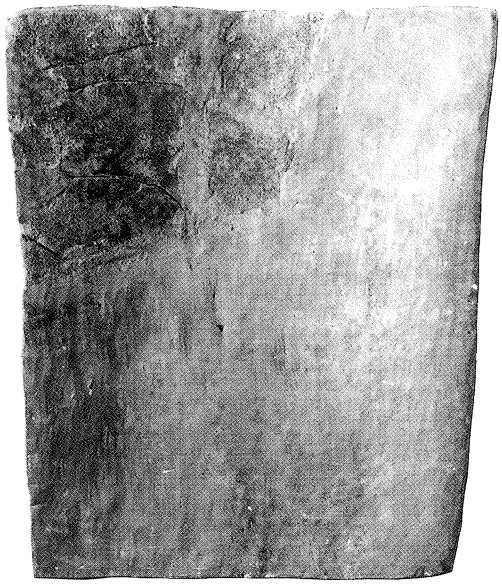
写　真　図　版

1.河内浦城　平瓦(普通瓦)



2.河内浦城　平瓦(普通瓦)

3.河内浦城　平瓦(色瓦:鈍い桃白色)



4.河内浦城　平瓦(色瓦:鈍い橙白色)

5.河内浦城　平瓦(普通瓦)

6.富岡城　平瓦(普通瓦)

図版1　小振り瓦(復元瓦)

7.富岡城　平瓦(色瓦:鈍い橙白色)

8.富岡城　平瓦(普通瓦)

9.河内浦城　丸瓦
(色瓦:鈍い桃色)

10.河内浦城　丸瓦
(色瓦:鈍い桃色)

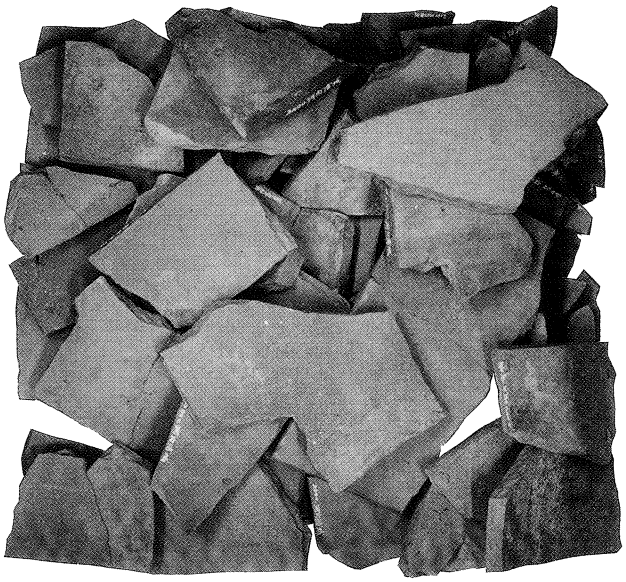
11.河内浦城　丸瓦(普通瓦)

12.河内浦城　軒平瓦(普通瓦)

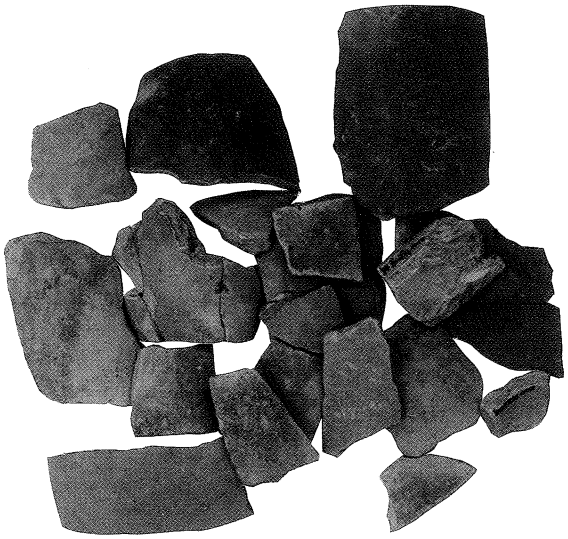
13.河内浦城　軒平瓦(色瓦:乳白褐色)

図版2　小振り瓦(復元瓦)

＊河内浦城から出土した小振り瓦は、普通瓦と色瓦に大別される。
＊色瓦は、基本的に鈍い桃白色で、その他、鈍い桃色、鈍い橙白色、乳白灰褐色、乳白褐色、灰白黄色、灰白褐色がある。



1.平瓦：普通瓦

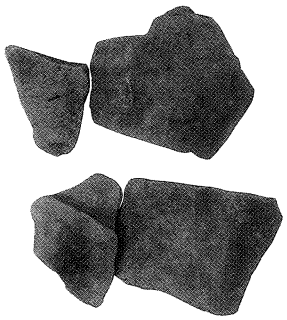


2.丸瓦：普通瓦

＊1・2のみ普通瓦。3～9は色瓦。いずれも、復元に至らなかった小振り瓦。

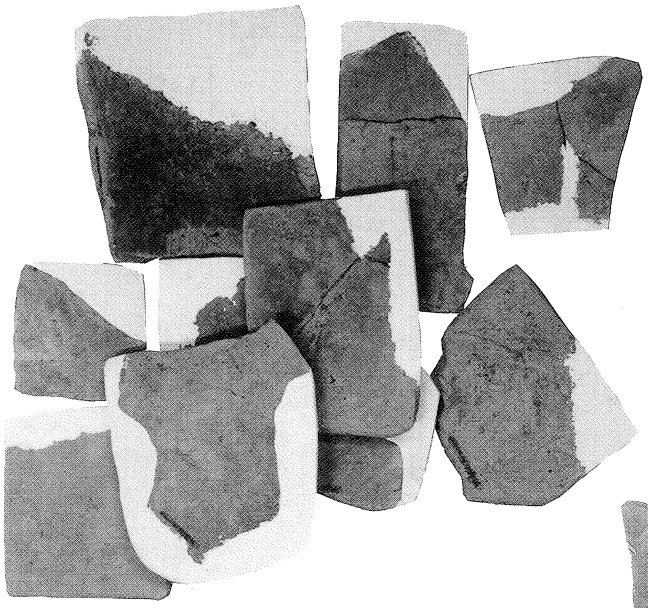
3.平瓦（鈍い桃色）

4.丸瓦：色瓦（鈍い桃色）



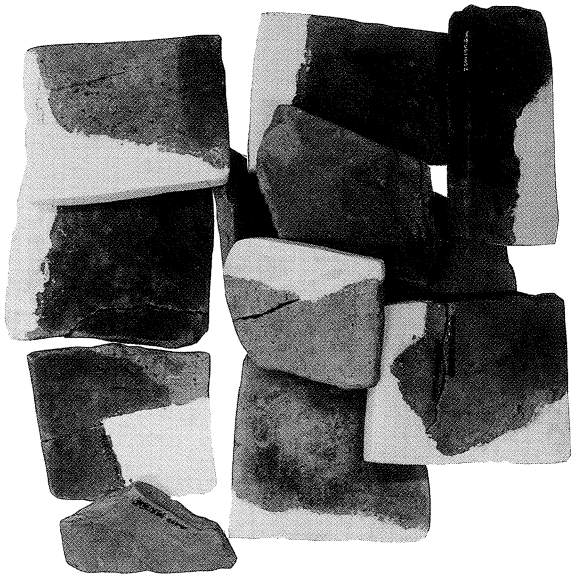
4.丸瓦：色瓦（乳白褐色）

図版3　小振り瓦（破片・河内浦城）



6.平瓦　色瓦(乳白灰褐色)

7.平瓦　色瓦(乳白灰褐色)



8.平瓦　色瓦(灰白黄色)

9.丸瓦:色瓦(灰白褐色)

図版4　小振り瓦(破片・河内浦城)

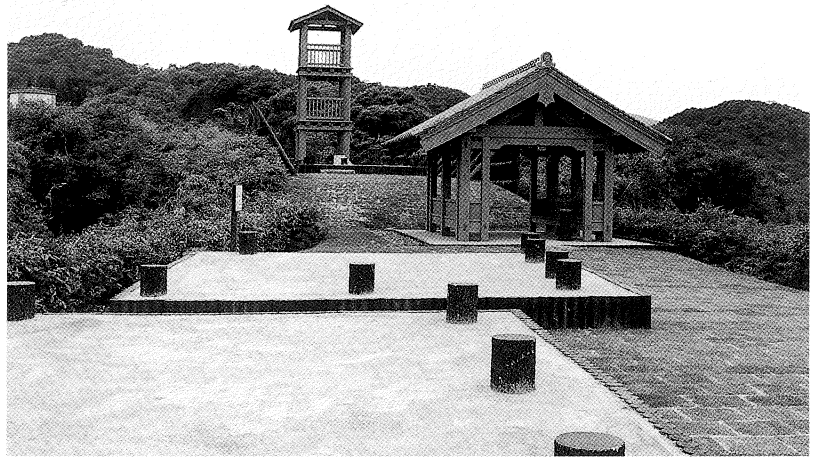
図版5　堀切　東側→西側
堀底は凸凹している

図版6　堀切　北側尾根より見おろす
南壁は確定できなかった

図版8　整備状況
堀切にかかる木橋と復元された望楼

図版7　河内浦城跡遠景　南方向より
手前は一町田川

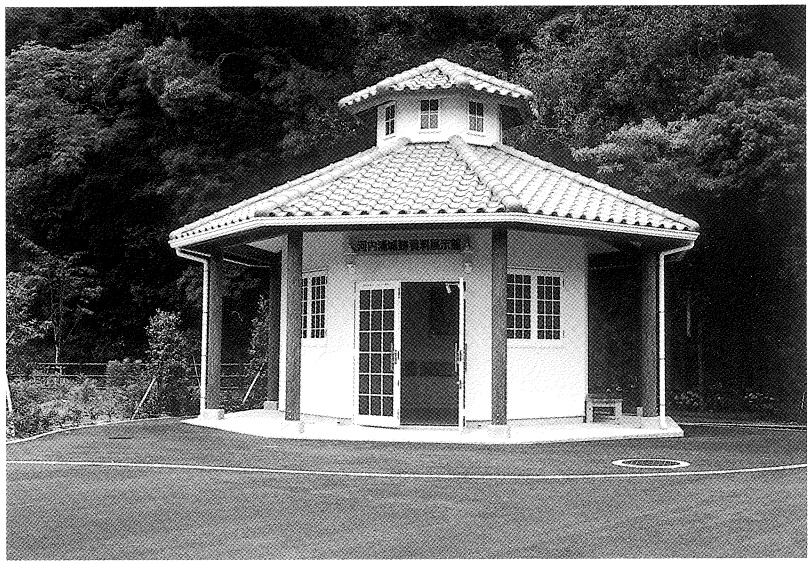
図版10　堀切の整備状況
堀壁や堀底は吹き付けられている



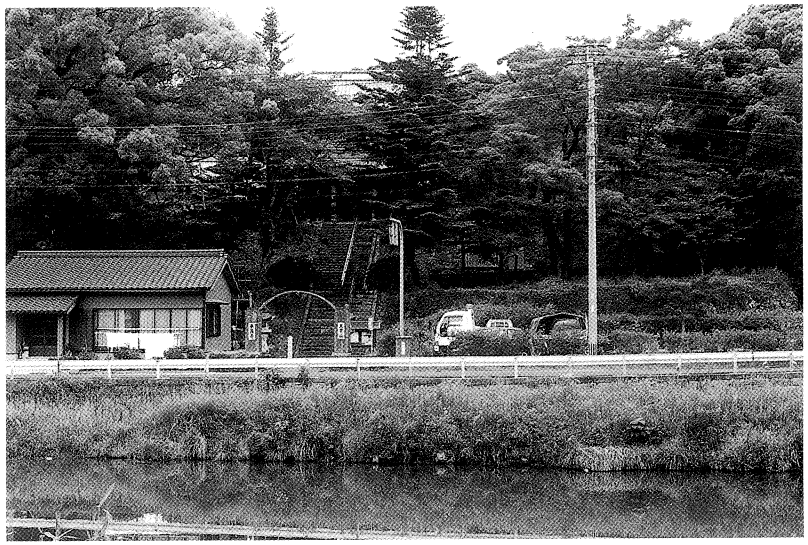
図版9　整備状況　Ⅰ郭一②→Ⅰ郭一①
遺構明示された建物4･5と復元された建物3

図版12　尾根道
堀切は1本も刻まれていない。間道の役割を果たす。

図版11　竪堀①
樹木を伐採して整備されている



図版14　河内浦城跡資料展示館
『愛夢里』敷地内に建設



図版13　崇圓寺遠景　手前は一町田川
館跡推定地

報 告 書 抄 録

書　　名	河内浦城跡Ⅲ
シリーズ名	河浦町文化財調査報告第４集
編著者名	今村克彦　大田幸博　石工みゆき　溝口真由美
編集機関	河浦町教育委員会
所　在　地	熊本県天草郡河浦町5223
発行年月日	平成13年３月30日

所収遺跡名	河内浦城跡
所　在　地	熊本県天草郡河浦町大字河浦字湯立免
調査期間	平成12年9月27・28日
調査原因	歴史公園化整備事業に伴う調査
調査成果	Ⅰ郭北側堀切の完掘 出土遺物：平瓦片、丸瓦片、軒丸瓦片、軒平瓦片

河浦町文化財調査報告第４集

河内浦城跡Ⅲ

平成13年3月30日

〔編集発行〕
河浦町教育委員会
〒863-1202　熊本県天草郡河浦町河浦5223
TEL（09697）6 －1111

〔 印 刷 〕
㈱大和印刷所
〒862-0931　熊本県熊本市戸島町920-11
TEL（096)380－0303